

SLAVIC RESEARCH CENTER

NEWS No. 121 May 2010



グローバルCOE

◆ GCOE・東西センター・笹川 USA 共催シンポジウム ◆
「日米同盟における地域的安全保障と沖縄」開催される

3月9日（火）ワシントン DC の東西センターにて“Regional Security and Okinawa in the US-Japan Alliance”が開催されました。このシンポジウムは、東西センター、笹川平和財団、GCOE の共催でおこなわれ、現地シンクタンク、報道機関、外交関係者を中心に 150 名余りの聴衆で席が埋まり、日本の安全保障政策の現状と今後について、活発な議論が交わされました。特に第二パネル Okinawa and the U.S.-Japan Alliance は、GCOE の目的の一つである「境界地域の声を中央にむけて発信」に沿うものであり、屋良・佐藤両報告とも、日米安保と嘉手納空軍基地の存在を見すえながら、海兵隊基地の沖縄立地が軍事的な合理性でなく、国民の目をそらすため本土から離れた地に封じ込めているという政治性を強調し、会場に大きなインパクトを与えました。



会場のようす

GCOE・東西センター・笹川 USA 共催「日米同盟における地域的安全保障と沖縄」

日時：2010 年 3 月 9 日 9:30-14:00

会場：コスモクラブ（2121 Massachusetts Avenue, N.W. ワシントン DC）

パネル 1 地域的安全保障と日米同盟（9:30-11:00）

報告：小川伸一（立命館アジア太平洋大学）、片原栄一（防衛研究所）

コメンテーター：R. M. デミング（ジョンホプキンス大学）

司会：S. リメイエ（ワシントン東西センター）

パネル2 沖縄と日米同盟（11:00-12:30）

報告：佐藤学（沖縄国際大学）、屋良朝博（沖縄タイムス）

コメンテーター：J. E. アワー（バンダービルト大学）

司会：岩下明裕（北大スラブ研究センター）

ランチオン・スピーチ（12:30-14:00）

デレク・ミッチェル（国防副次官補）

本シンポジウムの記録は現在、翻訳中で、5月末までには『スラブ研究センター・レポート』として刊行される予定です。なお、屋良、佐藤両氏の議論については、GCOEのホームページ（「ボーダースタディーズを読む」「ライブ・イン・ボーダースタディーズ」など）で読むことができます。[岩下]

<http://borderstudies.jp/essays/read/> <http://borderstudies.jp/essays/live/>

◆ GCOE・北大総合博物館第2期展示「知られざる北の国境」／◆
「市民セミナー」終了



樺太日露国境第二天測標石 南面（日本領側）

及びセンターが企画したレプリカ展示（標石1号と3号）はその資料的価値も含めて、来場者の眼を釘付けにしました。

なおこれに併せて、昨年10月から博物館で実施されてきた「土曜市民セミナー」も回を重ねるごとに参加者が増える盛況をみせ、無事終了しました。とくに初回の拠点リーダーの講演では精々、60人程度の入りだったのが、工藤信彦氏の「浮游する樺太」では150名で立ち見ができるに至り、荒井信雄氏の最終回も110名が押し寄せました。すでに4月から第2弾として「知られざる日本の国境：南の島嶼へ」が始まっており、5月14日スタートの博物館第3期展示「海疆ユーラシア：南西日本の境界」とともに、来館者に南の国境の醍醐味を味わっていただく予定です。[岩下]

北大総合博物館2階に設置された展示ブースでの第2期展示「知られざる北の国境：北緯50度の記憶」（2009年12月18日スタート）は、大きな反響を内外に与えましたが、5月9日を持って無事に終了しました。この展示は千島、オホーツク、樺太、満州という、かつての日本の北の境界にかかわる資料を展示してきましたが、なかでもシベリア・シリーズで著名な香月泰男画伯の習作「業火」の展示、樺太国境標石2号（日本で唯一の現物）

◆ GCOE「境界研究の拠点形成」のプロモーションDVD完成 ◆

GCOEの事業を内外に幅広くアピールするため、また総合博物館展示の記録を残すため、プロモーションDVDを作成しました。拠点リーダーのあいさつをはじめ、プロモーション用のダイジェスト版、一般の方々に国境研究の醍醐味を解説した本編（林忠行・北大副学長出演）、博物館第1期展示「ユーラシア国境の旅」及び第2期展示「知られざる北の国境」の

コンテンツで構成されており、見応え十分です。ボーダースタディーズを学ぼうとする方々にも役に立つづくりとなっており、GCOE の教育活動にも威力を発揮しそうです。なお、英語バージョンは 4 月 16 日に Association for Borderlands Studies の年次集会（ネバダ州リノ）、日本語バージョンは 4 月 22 ～ 23 日のセミナーでそれぞれ先行公開され、好評を得ました。ご関心のある方は GCOE 事務局まで。[岩下]

新学術領域研究

◆ 新学術領域研究「ユーラシア地域大国の比較研究」第 3 回国際シンポジウム ◆

2010 年度スラブ研究センター夏期シンポジウムは、7 月 7 日（水）～ 9 日（金）の日程で、センターで開催されます。今回は新学術研究第 6 班「地域大国の文化的求心力と遠心力」が組織し、「ユーラシア諸国におけるアジア表象」を総合テーマとしておこなわれます。目下企画されているセッションのテーマは、「文芸におけるアジア表象」「音楽における東と西」「宗教の諸側面」「国境を越える作家たち」「場所の精神」「中国のサブカルチャー」。国内をはじめ、ロシア、中国、インド、イギリス、アメリカ、ドイツなどからユーラシア地域大国の文化専門家たちを招聘する予定です。プログラムは 5 月初旬にはセンターのホームページに発表されますので、ご参照ください。たくさんの方々のご参加を期待しています。[望月]

組織委員会：望月哲男、越野剛、後藤正憲

コンタクト：tetsuo@slav.hokudai.ac.jp; gkoshino@slav.hokudai.ac.jp

◆ プロジェクト研究員の今年度の勤務地 ◆

若手研究者の育成を目的として、昨年からプロジェクト研究員制度が始められました。本年度における各研究員の配置は次の通りです。

氏名	博士号取得大学院	勤務地	主な研究協力班
任 哲	早稲田大学	北海道大学スラブ研究センター（主な勤務地は早稲田大学大学院アジア太平洋研究科）	第 2 班
星野 真	神戸大学	北海道大学スラブ研究センター（主な勤務地は東京大学社会科学研究所、神戸大学経済経営研究所）	第 3 班
福田 宏	北海道大学	北海道大学スラブ研究センター	第 4 班
小松久恵	ジャワハルラル・ネルー大学（インド）	北海道大学スラブ研究センター	第 5 班
住家正芳	東京大学	北海道大学スラブ研究センター（主な勤務地は東京大学次世代人文学開発センター）	第 6 班

昨年 ITP の企画に参加するためにプロジェクト研究員の雇用を一次中断されていた任哲さんが、今年 8 月から復帰されます。また、黛秋津さんが広島修道大学に就職されたため、後任に福田宏さん（元スロヴァキア駐在専門調査員）が採用されました。[後藤]

◆ 『比較地域大国論集』第 3 号の刊行 ◆

昨年 12 月 12 日、13 日に第 2 回国際シンポジウムが法政大学で開かれましたが、そのプログラムの中から初日の基調講演とラウンドテーブルの内容が、『比較地域大国論集』第 3 号として発行されました。タイトルは「ユーラシア地域大国の政治比較：共同作業の課題と分析

の方法」です。当シンポジウムの組織委員長でもある早稲田大学の唐亮氏が編集責任を務めました。全内容について、本領域研究のホームページからダウンロードすることができます。
<http://src-h.slav.hokudai.ac.jp/rp/publications/no03/contents.html> [後藤]

研究の最前線

◆ ロバート・グリーンバーグ教授の来訪 (GCOE・SRC 特別セミナー他) ◆



講演するグリーンバーグ教授

去る2月18日(木)、言語学者ロバート・グリーンバーグ教授(イエール大学/ニューヨーク市立大学ハンター・カレッジ)による特別講演会がおこなわれました。

グリーンバーグ教授は、エドワード・スタンキューヴィッチ教授、アレクサンダー・シェンカー教授らの下で研鑽を積んだスラヴ語学者で、現在のアメリカの中堅世代のスラヴ語学者の中で最も優れた学者の1人です。グリーンバーグ教授は、キャリアの初期には主に文法研究で成果を上げられ、バルカ

ン半島諸言語の「呼びかけの形」(例えば、呼格形の意味、動詞命令形など)を、標準語および豊富な方言資料をもとに分析した *The Balkan Appellative* (LINCOM, 1996) は高く評価され、2005年には第2版も出版されています。

教授が最も有名になったのは、かつてのセルビア・クロアチア語の崩壊と分化に関する社会言語学的研究である *Language and Identity in the Balkans* (Oxford, 2004) であり、本書は2005年度のAATSEEL (American Association of Teachers of Slavic and East European Language) のスラヴ言語学最優秀書籍に選ばれました。翌2006年には本書のクロアチア語訳が出版されたのですが、それに対しダリボル・ブローヴィッチ、ラドスラヴ・カティッチ、イヴォ・プラニコヴィッチといったクロアチア言語学界の重鎮による円卓会議が開かれ、彼らはこぞってグリーンバーグ教授を批判し、その結果の(反)論集を出版するという、半ば事件が起きました。尚、*Acta Slavica Iaponica* の27号(2009年)にはプレドラグ・ピペル教授(ベオグラード大学)の本書に対する書評が掲載されておりますので、興味のある方はご一読下さい。

今回の特別講演は“The Redrawing of Ethnic and Linguistic Borders in the Balkans: Implications for Serbia, Macedonia, and Montenegro”と題され、旧ユーゴスラヴィア崩壊によって生じた11もの新たな国境、それを背景とした新しい社会言語学的な境界の意味と各国の言語政策について論じられました。グリーンバーグ教授によると、旧ユーゴスラヴィアの国境の引きなおしは、政治的な安定化を生み出すものではなく、引きなおしによって言語的マジョリティーとマイノリティーが創出され、それにより言語に対する権利の要求が各地で

生じ不安定になることについて、旧ユーゴスラヴィア、隣接するアルバニア、ギリシャとの関係などを踏まえて分析がなされました。

現在 GCOE プログラムで進められている境界研究に相応しい研究テーマであり、講演後の討論では、言語学、政治学、社会学に関する質問やコメントはもちろんのこと、話題は言語の政治的な分化と境界の引きなおしが引き起こす経済的な問題にまで及び、地域研究における言語研究の意義、同時に学際的な研究の必要性が改めて示された大変興味深い講演会となりました。講演会の内容は、昨年 12 月の GCOE シンポジウムで来日したトマシュ・カムセラ准教授（ダブリン大学）と野町（センター）の共同編集による論文集 *Borders of Identity and Language in Modern Central Europe*（仮称）に掲載される予定です。

札幌での講演会に続いて、グリーンバーグ教授は東京でも講演されました。これは GCOE と日



東京での観光、ご子息のマイケル君と

本スラヴィスト協会との共催で、“Directions and Prospects for Slavic Studies in a Changing Political Landscape: Some Observations from an American Slavist” という題目でした。規模や条件に違いはありますが、それでも日本と同じ非スラヴ圏であるアメリカのスラヴ語研究の現状の紹介は、日本のスラヴ語研究のあり方を考える上でとても参考になるものでした。この講演では、グリーンバーグ教授からアメリカの「スラヴ研究」と「スラヴ語学研究」の関係についても伺うことが出来ました。アメリカの「スラヴ研究」は、社会科学を中心に発達してきたものですから、文献学などの人文学研究から発展してきたヨーロッパの伝統的な「スラヴ学」とは歴史も背景も異なります。このような違いも手伝い、スラヴ地域研究誌の最高峰の 1 つとされる *Slavic Review* では、純粋なスラヴ語学の論文が掲載されることは無いようです。*Slavic Review* にこれまで掲載された言語関係の論文は、政治学、歴史学、社会学的な側面を持つものに限られていますが、その 1 つにグリーンバーグ教授の論文“Language Politics in the Federal Republic of Yugoslavia: The Crisis over the Future of Serbian”（第 59 巻 3 号、2000 年）があります。この論文について伺ったところ、*Slavic Review* は、掲載に至るまでのプロセスが一筋縄ではいかず、ディシプリンの基盤が異なる査読者を納得させるのは大変な困難があり、一度は投稿を取り下げたこともあったとのことでした。それでも *Slavic Review* に投稿したのは、自身のキャリアのためだけではなく、「スラヴ語研究」に対する良心と責任とのことでした。グリーンバーグ教授が「アメリカのスラヴ語研究は、現在必ずしも活発とは言えないが、スラヴ語研究もスラヴ研究の一部をなす重要な分野であり、その貢献と意義は常に示す必要がある」と力強く言われたのが大変印象に残りました。〔野町〕

◆ 公開講座 ◆

《地域大国比較の試み：ロシアを中国やインドと比べたら何が分かるか？》まもなく開講

今年度の公開講座は、現在センターでおこなわれている新学術領域研究「ユーラシア地域大国の比較研究」をもとにおこなうことになりました。このプロジェクトでは、ロシア、中

国、インドなどのユーラシアの地域大国を外交、内政、経済、歴史、社会、文化など多角的な視点から総合的に比較する試みがなされています。公開講座では、この研究の成果の一端が分かりやすく解説されます。例年の公開講座と異なる大きな特徴は、講師に、スラブ・ユーラシア地域（旧ソ連・東欧地域）の研究者だけでなく、中国やインドの専門家が多数含まれていることです。中国やインドと比べることにより、ロシアの特徴についてより深く理解し、同時に、中国やインドについても学んでいただこうという意欲的な講座です。

日程、講義題目、講師は以下の通りです。[田畑]

回	日程	講義題目	講師
第1回	5月10日(月)	ロシア、中国、インドの共通性：経済の視点から	田畑伸一郎（センター）
第2回	5月14日(金)	アフガニスタンをめぐる「小さな冷戦」：ロシア、中央アジア諸国、中国、インド	山根聡（大阪大学）
第3回	5月17日(月)	新興3カ国の連携の思惑と限界：国際政治学の視点から	伊藤融（防衛大学）
第4回	5月21日(金)	BRICsの台頭と世界経済の行方	佐藤隆広（神戸大学）
第5回	5月24日(月)	中国の連環画・ポスターに見えるロシア・ソ連イメージ	武田雅哉（北大文学研究科）
第6回	5月28日(金)	都市＝農村関係の中露比較	田原史起（東京大学）
第7回	5月31日(月)	グレートゲーム再考：中央アジアから見た英中露帝国	宇山智彦（センター）

◆ 2011年度特任教員（外国人）の募集 ◆

第33期特任教員（外国人）招聘プログラム（FVFP）の募集要項がスラブ研究センターのウェブサイトに掲載されました（4月5日）。招聘期間は2011年6月から2012年3月までの、原則として5ヵ月以上、10ヵ月以内です。

詳細は英文ウェブサイト(<http://src-h.slav.hokudai.ac.jp/fvfp/fvfp-fr.html>)をご覧ください。応募締め切りは2010年5月31日です。[荒井]

◆ ミルゾヒド・ラヒモフ氏の滞在 ◆

ウズベキスタン科学アカデミー歴史研究所のミルゾヒド・ラヒモフ（Mirzohid Rahimov）氏が、2010年3月10日から4月22日まで、国際交流基金知的交流フェローシップ事業によりセンターに滞在しました。ラヒモフさんは中央アジアの現代史・国際関係が専門で、今回の研究テーマは「日本と中央アジア：多国間協力の現状と展望」でした。センター滞在中は、旺盛に研究に取り組むとともに、社交的な人柄で多くのセンター関係者と親しくなり、ウズベク・ピラフの料理の腕前も披露してくれました。[宇山]

◆ リチャードソン氏の滞在 ◆

英国バーミンガム大学地理学部博士課程のポール・リチャードソン（Paul Richardson）さんが、同大学の奨学金によりセンターに2010年4月から2011年3月まで滞在中です（センター3階の院生室）。研究テーマは日ロ領土問題に関するロシア国内の言説分析です。担当教員はウルフ・荒井です。[荒井]

◆ ITP派遣者のパートナー校での活躍 ◆

ITP 事業は2年目を迎えましたが、派遣者である浜由樹子さん、溝上宏美さん、任哲さんは、提携先（ハーヴァード大学デイヴィスセンター、オックスフォード大学聖アントニー校、ジョージワシントン大学エリオット校）で活発にジョイント企画を組織しました。<http://src-h.slav.hokudai.ac.jp/itp-hp/report/report.html> を参照ください。また、第2回スラブ・ユーラシア研究東アジア・コンファレンス（学界短信の記事参照）では、ITP 参加者である藤原潤子、井上まどか、マルチン・ホセク、須田将、高橋沙奈美、越野剛、大野茂樹、武田友加の各氏が報告しました。[松里]

◆ 英語キャンプの開催 ◆

2010年2月22日から28日まで、真駒内青少年会館で、ITPの企画で二回目となる英語キャンプが開催されました。2008年3月におこなわれた一回目の合宿と同じく、グレゴリー・コズロフスキー講師を中心に、原稿を読まずにスピーチするという刺激的な訓練がおこなわれました。27日に開かれた「模擬学会」では、参加者たちはそれぞれが見出した自分のスタイルを披露し、本物の国際学会と見まごうような熱心な討論が交わされました。全国から若手研究者13名が参加しましたが、今回は中国・ベトナム・ブータンの地域研究者も加わり、最近のスラブ研究センターが手がける研究プロジェクトの広がりを反映するものとなりました。ITP ホームページには参加した若手研究者たちのエッセーが掲載されています。[越野]

◆ 専任研究員セミナー ◆

ニュース前号以降、下記の専任研究員セミナーが開かれました。

2月10日：田畑伸一郎「ロシア財政制度の資本主義化」
センター外コメンテータ：杉浦史和（帝京大学経済学部）

2月24日：望月哲男「19世紀ロシア文学のヴォルガ表象：アポロン・グリゴリエフ『ヴォルガをさかのぼって』を中心に」 センター外コメンテータ：鈴木淳一（札幌大学外国語学部）

3月29日：野町素己“On Predicting Contact-Induced Grammatical Change”
センター外コメンテータ：佐藤昭裕（京都大学大学院文学研究科）

田畑ペーパーは、ソ連時代末期から現在までのロシアの財政制度を、社会主義経済システムの崩壊に対応しての変化と、1998年の金融・通貨危機を経てようやく達成された財政の安定化、歳入構造と歳出構造の変化といった視点から概観したもので、東欧諸国との比較も部分的に含んでいました。討論では、ロシア政府はどのような経済思想を持っているのか、財政政策にはどのような省庁や専門家集団が影響してきたのかなどが話題になりました。

望月ペーパーは、望月科研のテーマであるヴォルガと、グローバル COE のテーマである境界研究を結びつけるものでした。具体的には、カラムジーンの詩における帝国の偉大さのメタファーとしてのヴォルガ、ネクラソフの詩における叙情の空間であると同時に民衆の苦悩のシンボルでもあるヴォルガ、グリゴリエフの詩における人間の運命や情熱体験の象徴としてのヴォルガを取りあげ、詩世界の中のさまざまな境界をヴォルガが表象していることを論じました。討論では、ヴォルガ上流・中流・下流の差異や右岸と左岸の関係、文芸的調

査旅行という国家事業と詩世界の関係、グリゴリーエフのヴォルガ地域や社会問題への関心の稀薄さなどが話題になりました。[宇山]

野町ペーパーは、ベルント・ハイネ教授（ケルン大学名誉教授）との共著によるもので、スラヴ諸語における具格（造格）と随伴格（前置詞 *с*+ 造格）の融合について考察するものでした。言語接触による言語構造の変化は予測できないという通説がありますが、本ペーパーはスラヴ諸語の場合、特にドイツ語やイタリア語との密接な言語接触による言語変化として、上述の格の融合がほぼ規則的に起こり、その変化は予測しうる性質であることをハイネ教授が提唱する文法化理論の枠組みで示しました。コメンテータの佐藤昭裕教授からは、ボラヴ語やスロヴィンツ語といった「エキゾチック」なスラヴ諸語の方言データを豊富に用いた本研究がスラヴ語学および言語類型論にとって意義深い貢献であることと評価されましたが、その一方で、他の格に見られる類似現象を踏まえるべきという指摘もなされました。その他の参加者からは、論文における「言語」と「方言」の扱い方、言語教育がもたらす言語変化などについて幅広い議論が展開されました。[野町]

◆ 研究会活動 ◆

ニュース 120 号以降の、センターでおこなわれた北海道スラブ研究会、センターセミナー、新学術領域研究会、GCOE 研究会、及び昼食懇談会の活動は以下の通りです。[大須賀]

- 1 月 26 日 新学術領域研究「ユーラシア地域大国の比較研究」第 5 班「国家の輪郭と越境」研究会
M. アクエル（国際イスラム大、パキスタン）“The Idea of Dar al-Harb and Dar al-Islam: Concepts and Conflicts in British India”；小松久恵（大阪大）“The Imaging of British India: Katherine Mayo’s Mother India”
- 2 月 3 日 H. ジェイコブ（ジャワハルラール・ネルー大、インド）“The Kashmir Problem: Past, Present and Future”（GCOE・SRC セミナー）
- 2 月 6 日 GCOE 若手研究者フォーラム「公教育のなかの境界」 藤原智子（北大）「占領期在日朝鮮人教育史：山口県に着目して」；松下佳弘（京都大）「占領期における朝鮮人学校政策の展開：京都府・滋賀県の事例から」
- 2 月 6 日 第 11 回サハリン・樺太史研究会 越野剛（センター）「初期ソ連文学におけるサハリン島：流刑制度の記憶」；原暉之（北大名誉教授）「日露戦争後ロシア領サハリンの再定義」
- 2 月 9 日 岩花剛（北大）「永久凍土研究を通して見えたロシア」(第 5 回 GCOE・SRC ボーダースタディーズ・セミナー)
- 2 月 12 日 鈴木隆泰（山口県立大）「内なるボーダーと外なるボーダー：なぜインドからカーストがなくなるのか？」（GCOE・SRC 特別セミナー）
- 2 月 17 日 M. フィンケ（センター）“Why Did Dr. Chekhov Ignore His TB?”（センター・セミナー）
- 2 月 18 日 R. グリーンバーグ（イエール大、米国）“The Redrawing of Ethnic and Linguistic Borders in the Balkans”（GCOE・SRC 特別セミナー）
- 2 月 18 日 大島一（国立国語研究所）「オーストリア・ブルゲンラント州におけるハンガリー人マイノリティの言語問題：ドイツ語との二言語使用状況に関する調査および考察」（共同利用・共同研究拠点公募プログラム研究報告会）
- 2 月 28 日 「プラトンとロシア」研究会 今仁直人（横浜国立大）「ラジシチェフとプラトニズム」；下里俊行（上越教育大）「ある神学生の自己形成：ニコライ・ナヂェージュデンとニコライ 1 世時代の思想状況」；兎内勇津流（センター）「アトスにおけるロシア人をめぐる最近の研究」；杉浦秀一（北大）「プラトン、ソロヴィヨフ、ノヴゴロツェフ」；渡辺圭（千葉大・院）「20 世紀初頭のロシア正教会における神名論」；貝澤哉（早稲田大）「ワシーリイ・セゼマンの存在論的認識論とプラトン」
- 3 月 1 日 志摩園子（昭和女子大）「ヴェルサイユ体制期の小国ラトヴィヤ」（客員研究員セミナー）

- 3月11日 Z. クンダクバエヴァ（センター）「18世紀北カスピ地域におけるロシア帝国の政策：伝統の創造と象徴権力（ロシア語）」（センター・セミナー）
- 3月17日 鳥山祐介（千葉大）「エカテリーナ期－ナポレオン戦争期のロシア詩の中のヴォルガ」（客員研究員セミナー）
- 4月13日 緊急セミナー「『色の革命』：クルグズスタンとウクライナの急展開」宇山智彦（センター）「クルグズスタンの2度目の『革命』：民主化・暴力・外圧」；藤森信吉「ヤスコヴィッチ当選は過去への回帰なのか：オレンジ革命後のウクライナ」（北海道スラブ研究会）
- 4月14日 「古儀式派から見たロシア・ソ連史」研究会 下斗米伸夫（法政大）「ボンチ・ブルエビッチの古儀式派論」（SRC2010年度プロジェクト型共同研究）
- 4月20日 M. ラヒモフ（歴史研究所、ウズベキスタン）“Japan and Central Asia: Dynamics of Bilateral and Multilateral Partnership”（センター・セミナー）
- 4月22日 永井リサ（大阪大）「中ロ国境の現況について：木材貿易を中心に」（GCOE・SRC 特別セミナー）
- 4月23日 井潤裕（GCOE プロジェクト研究員）「辺境開発の地政学：20世紀樺太の製紙産業」（第6回 GCOE・SRC ボーダースタディーズ・セミナー）
- 4月24日 研究会「比較帝国論の方法を考える」木畑洋一（成城大）「帝国史研究の諸課題：イギリス帝国史研究の視点から」；松里公孝（センター）「実証史学における帝国論と国際世界分析における帝国論を架橋するために」；宇山智彦（センター）「帝国統治と植民地認識をめぐる『周縁』からの視座：帝国の善悪論を超えて」；長縄宣博（センター）「帝国を映す鏡としての人間の移動：基盤、ネットワーク、媒介者」；秋田茂（大阪大）「帝国の脱植民地化の比較史：国際秩序論との関連で」；川島真（東京大）、栗屋利江（東京外国語大）、守川知子（北大）、古矢旬（東京大）「コメント・自由討論」（新学術領域研究「ユーラシア地域大国の比較研究」第4班科学研究費基盤B「近代化とグローバル化の文脈における比較帝国史」 共催研究会）

人事の動き

◆ 越野剛氏の就任 ◆



越野 剛 氏

センターでは、共同研究・共同利用拠点の認定（2010～2014年度）に伴い、4月1日付で越野剛さんを助教として採用しました。

越野さんは1972年生まれ。北海道大学を卒業後、1994年に同大学大学院文学研究科修士課程に入学、ロシア文学を専攻しました。1996年に博士課程に進学し、2003年3月に単位取得退学。在ベラルーシ日本大使館専門調査員、スラブ研究センター COE 非常勤研究員、日本学術振興会特別研究員などを務め、2009年からセンターの特任研究員に赴任していました。

研究分野はロシア・ベラルーシ文学で、チェルノブイリ原発事故を題材にした文学作品、歴史小説とナショナルヒストリー、ソ連時代の学校における子供文化といったテーマについて研究を発表してきました。今後もこうした研究を発展させていくことが期待されますが、助教就任後の課題はドストエフスキー文学における病気のイメージについて博士論文を早く完成させることのようにです。[編集部]

◆ 2010年の非常勤研究員 ◆

センターでは、今年も若手研究者の雇用による共同研究の推進を目的として、非常勤研究員の公募がおこなわれました。3月31日の締め切りまでに6名の応募があり、慎重な選考を経て、井上暁子さんと瀧口順也さんの2名が5月1日付けで採用されました。



井上暁子さん

井上さんは1975年生まれ。北海道大学文学部を卒業後、99年に同大学大学院文学研究科の修士課程に入学、ドイツ文学専攻。ワルシャワ大学ポーランド学科への留学(2000-2002)を経て、2003年3月、北海道大学大学院の修士課程修了。2003年4月、東京大学大学院総合文化研究科地域文化研究(ロシア・東欧科)の博士課程に入学。ベルリン・フンボルト大学ポーランド学科留学(2004-2006)、ワルシャワ大学ポーランド学科留学(2006-2007)、日本学術振興会特別研究員(DC2)を経て、2010年3月、東京大学の博士課程単位取得退学。研究分野は、ドイツ・ポーランド越境文学。20世紀後半、ドイツ連邦共和国へ移住したポーランド人作家によるポーランド語／ドイツ語文学を通して、移民の文学表現のもつ可能性や戦略性について論じてきました。センターでは、ポーランド移民作家の文学を、作家たちの出身地域であるドイツ＝ポーランド国境地帯の文学と関連づけることを目指されます。



瀧口順也さん

瀧口さんは1980年生まれ。明治大学政治経済学部を卒業後、2003年に英国マンチェスター大学修士課程に入学し、ヨーロッパ近現代史(MA in Modern European History)を専攻しました。2005年に同大学博士課程(PhD in History)に進学。指導教官はピーター・ガトレル教授およびヨース・ゴーリツキー教授。2009年にPhD in Historyを修得。ソ連共産党(ボリシェヴィキ)史を専門研究とし、特に1917-1930年までを主対象としてきました。博士論文では、1903-1927年に開催されたボリシェヴィキの党大会を政治史・文化史の両側面から考察しました。センターでは、考察の対象とする党大会の範囲を広げ、1930年代の党大会および1956年の第二十回党大会の研究を進めることを目指されます。また、異なる政治文化下で開催された諸国の党大会の比較研究にも着手したいとお考えです。[編集部]

◆ 2010年の客員教授 ◆

公募していました客員教授は審査の結果、次の6名の方々にお願いすることになりました。[編集部]

氏名	所属	研究テーマ
阿部 賢一	立教大学文学部	20世紀のチェコ文学における「ロマ」の表象
大平 陽一	天理大学国際学部	カレル・タイゲの社会主義リアリズム論について
阪本 秀昭	天理大学国際学部	極東地方古儀式派村の信仰生活と村落・親族構造の研究
志摩 園子	昭和女子大学人間社会学部	ヴェルサイユ体制期の小国ラトヴィヤの研究：冷戦終焉後の新国際秩序の歴史的背景として
中村 唯史	山形大学人文学部	20世紀ロシア文学の理論と創造にみる言語観
堀江 典生	富山大学極東地域研究センター	ロシア国境地域経済連携の考察

◆ 2010 年の日本学術振興会特別研究員 ◆

センターで今年度、学振特別研究員として在籍滞在するのは次の4名の方々です。[編集部]

氏名	最終学歴	研究テーマ
安達 大輔	東京大学人文社会系研究科博士課程単位取得退学	近代的読書メディアとしてのロシア・ロマン主義文学研究：「社交界小説」を中心に（継続）
菊田 悠	東京大学大学院総合文化研究科博士課程修了	中央アジア定住地帯の秩序の再編成プロセスにおけるイスラーム聖者と聖性の役割（継続）
佐藤 圭史	九州大学大学院比較社会文化学府博士課程修了	ソ連末期における民族問題マトリョーシュカ構造の実証研究（継続）
宮崎 悠	北海道大学大学院法学研究科博士課程修了	公共宗教と国民形成の政治力学：ポーランド・ナショナリズムとカトリック教会（新規）

オックスフォード・ラウンドテーブルに出席して

家田 修（センター）

3月21日から26日までイギリスのオックスフォード大学で環境問題に関するラウンドテーブルが開催され、筆者も呼ばれて報告をしてきた。正式なラウンドテーブルの名称はOxford Round Table: The Copenhagen Protocol; Problems and Possibilities - An interdisciplinary perspectiveである。この名称にあるように2009年12月に開催予定だったコペンハーゲンでの地球温暖化会議（COP15）を意識した国際会議ではあったが、その結末を見る前に報告を用意し



会議風景

なければならない、基本的にはそれぞれの参加者の研究テーマが地球温暖化との係わりの中で報告された。

この会議では全部で30の報告が行われ、それぞれ15分のプレゼンテーション、15分の質疑応答がなされた。参加国はアメリカ、イギリス、スウェーデン、カナダ、オーストラリア、南アフリカ、ジンバブエ、そして日本の8カ国であるが、アメリカが圧倒的多数だった。しかし国籍はパスポートによるもので、アメリカ人といっても出身を尋ねると、エジプト、インド、ロシアなど多様であり、報告された話題も非常に多岐にわたるものだった。

いまここで30の報告について述べる余裕はないが、今回の会議で改めて感じたのは、アメリカの科学者たちが「地球温暖化がなぜ問題なのか」、「地球はこれまでも寒冷化と温暖化を繰り返してきたのではないか」、「なぜそのような研究に予算をつける必要があるのか」という世論、そして政治家たちの強い疑問に常にさらされているということである。今回の会議の中で数億年、数千万年数百年規模での大気温度の変動を推定した若い研究者がいたが、それに対してはすぐさま、「それをアメリカの政治家の前で話す時には気をつける必要がある」

と批判まじりの声が上がった。これに関連してもう一つ印象的だったのは、地球温暖化は基本的には地球や自然の問題ではなく、人間の問題であるという強い認識である。それは温暖化の原因を人間が生み出しているという意味だけではない。日本では地球温暖化を考えるさい「地球を救おう」という類いの標語をよく耳にするが、今回の出席者の大半は、あえて標語風に表現すれば、「人類を救おう」という視点からの温暖化認識が基本だった。前の話に続けて言えば、「地球を救おう」などと言おうものなら、「気の長い話ですね、それなら研究費はいらないでしょう」ということになる。もちろん報告者の中にはミシシッピ・デルタにおけるマングローブの植生変化を取り上げた生物学者のように、「生態系を救いたい」という思いをみてとることもできる。またこうした論調の中でジンバブエからの報告者が、「先進国は地球温暖化についていろいろ言うが、その被害を受けている人々に何もしていない」と厳しく批判する一幕もあったことは書き留めておくべきであろう。



食堂での晩さん会

日本が海洋資源の保護を国際的に約束した直後でもあり、日本の研究者がオホーツクの海洋資源を「巨大魚付き林エコシステム」として保全するイニシアティブをとっているという話は、絶好のタイミングで世界各国からの参加者に理解してもらえたと思います。

今回の会議はリンカーン・カレッジがホスト役を務めました。このカレッジは15世紀に設立され、オックスフォードの中では比較的古い方で、町の中心にあります。外見はオックスブリッジに特有な石造りですが、内装は近代化されていて、快適でした。三度の食事も全てカレッジの食堂で学生と同席でした。歴代関係者の肖像が見守る典型的な古めかしい内装で、タイムスリップした雰囲気を楽しみました。写真は最後の夜の晩餐のときのものです。

今回のラウンドテーブルでは、テーマが今ホットな地球温暖化問題だったこともあり、マスコミ向け声明を採択しました。その声明文の写しを右に掲げておきます。

筆者の報告は、スラ研では田畑さんが担当している北大のオホーツク環境プロジェクト及びやはりスラ研が係った「アムール・オホーツク・コンソーシアム」の話を交えて、跨境的地域 Transborder region における環境政策についてでした。今回の出張予算はオホーツク環境プロジェクトから出してもらったこともあり、初めから北大とオホーツク研究の成果を前面に出すつもりでしたが、おりしもワシントン条約締結国会議でクロマグロの禁輸措置回避に関連して



Oxford Round Table

Two Decades of Academic Discourse

PRESS RELEASE

A five day Oxford Round Table on *The Copenhagen Protocol: Problems and Possibilities*, concluded today at the Oxford Round Table held at Lincoln College in the University of Oxford, Oxford, U.K. March 22 through March 26, 2010. Attending the Round Table were scientists and professionals from eight countries: Australia, Canada, Japan, South Africa, Sweden, U.K., U.S.A. and Zimbabwe. Professor Osamu Ieda of Hokkaido University was among those who presented papers and approved this release.

The participants, *en banc*, composed the following statement:

The earth processes are changing in numerous ways; many of these are detrimental to humanity and other species. Worldwide, human society has accelerated the use of natural resources, bringing about massive changes in the productive base of land, air and water resources. A consequence of this has been reduced biological diversity because of habitat loss, land use change and the spread of invasive species. Degradation of ecosystems has been accentuated by introduction into the environment of massive quantities of inorganic and organic materials that degrade the integrity of ecosystems. The climate change will exacerbate the degradation of ecosystems that are necessary to support a still-expanding human population.

Papers at the Round Table included multiple perspectives from a diversity of biological, chemical, physical, ecological, educational, legal, engineering, social science, public health, forestry, geology, architecture and economic perspectives.

Participants called for global political leadership to commit to a redefinition of economic growth in light of market imperfections, social inequities, quality of life and sustainability of resources. At the basis of this should be the concept of ecological justice and rights of dignity for all people of the earth without regard to culture, gender, ethnicity or region.

Participants agreed that the earth's biosphere has been a dynamic interacting system throughout its history. However, a relatively stable climate which has characterized approximately the last 10,000 years is essential to a thriving human society.

Specific recommendations on a number of strategies included the following:

- Strategies that seek to synthesize the best indigenous and historical knowledge and practices from traditional cultures with the latest technical improvements based on democratic decisions. The intent is to take the best from each regional and culturally appropriate sectors to maximize the benefit of all and to minimize detrimental impacts on the earth and humans.
- That energy, manufacturing and waste cycles should, as much as possible, conform to closed loops with the primary goal of minimizing waste and preventing pollution. This should include minimizing the energy, pollution and waste costs incurred by current inefficient transportation systems.
- Rally science and technology experts to advocate that government leaders enact stronger and more cohesive climate change policy and strategy.
- Support a mix of local, regional and global action that involves the active and democratic involvement of all stakeholders and shifts the balance toward data-driven scientific knowledge and public participation away from special interest manipulation.
- Youth today are growing up more environmentally conscious; we should foster and fund stronger curricula of educational institutions that reflect and advance this interest as they inherit the earth from us. We need to bequeath it to them in an improved state.

The Round Table affirms that the discovery of new concepts and invention of new technologies should be directed toward a richer quality of life for all by minimizing environmental impacts and moving society toward long-term sustainability with a reorientation of societal priorities.

Oxford Round Table
Lincoln College, U.K.

cc: ieda@slav.hokudai.ac.jp

The Oxford Round Table is a not-for-profit educational organization chartered in England and Wales

U.K. Office: Harris Manchester College, Mansfield Road, Oxford OX2 3TD and

Please direct inquiries to the U.S. Office: Coordinator, 5150 East Pacific Coast Highway, Suite 200, Long Beach, CA 90804

Phone: (562) 346-3216; Fax: (562) 346-3215; E-mail: coordinator@oxfordroundtable.com; web site: www.oxfordroundtable.co.uk

日本人が喉歌について私に再び「気づかせて」くれたこと

マリーナ・モンゲーシュ（国立民族学博物館外来研究員）

2007年、客員教授としてスラブ研究センターに3ヵ月過ごすことができるという幸運を手にすることができた。この滞在はすべての面で非常に成果のあるものであり、多くの知見を得られたものであった。ロシアに帰国するに当たり、多くをやり遂げたという気持ちと、あっという間に終わってしまったという残念な気持ちが共存した。

成田に到着したが、数時間到着が遅れたため、ホテルをあてがわれた。その日は小雨が降っていた。ホテルの部屋で雨が窓ガラスで気まぐれに形を変えて流れてゆくのを見ていた。突然、「私は日本に帰ってくる」という考えがひらめいた。文字通り「そうなるのだ」と考えが心の中で確信にかわっていくのを感じた。我々ドゥバ人にとって、雨は良いことが起こる兆候であり、雨のざわめきの中で起こる考えは現実と縁のないものではないと考えられている。

予感は裏切らなかった。こうして私はまた大好きな日本にいる、今回は大阪の民族学博物館に。関西空港に着陸したときも小雨だった。まるで去った時の雨が降り続けていたかのよう。民博の小長谷有紀教授は数日後に女性喉歌アンサンブル「トゥバクィズィ（トゥバの娘たち）」のコンサートがあると教えてくれた。実際、同郷人の写真が載った広告がいたるところに貼られていた。



国立民族学博物館での「トゥバクィズィ」の公演

アジア諸民族の文化を研究する人類学者として私は喉歌を次のように考えている。音楽の特殊なジャンルとして、喉歌は中央アジアの文化歴史的な領域の中のサヤン＝アルタイ山脈地域にいる数少ない人々、トヴァ人、ハカス人、アルタイ人、モンゴル人といった人々、地域的にはこれらの諸民族の場所を超えたところにいるバシキール人、唱法は初期的な段階にとどまっているもののヤクート人やブリヤート人といった人々の間に広まっている。しかしこの中でトヴァ

人だけが多様で豊かなスタイルを有し、精神文化とも密接かつ有機的に結びついて、最も完全な形で伝統を保持している。科学的な研究対象として喉歌、ホーメイ（ホーミーともいう）はなにより発声が独特で独自であることから注目を集めてきた。ホーメイジ（ホーメイ歌手）は歌う時に同時に二つの音を出し、一つの音は聴く人に何か楽器が演奏されているように聞こえる、実際は人間の咽頭から出ている音である。

伝統的にホーメイは男性の歌うものと考えられ、男性の大胆さやよき男の精神の象徴であった。牧民、馬飼、トナカイ飼、猟師、独身者、女たらしの歌とよばれるものが同じジャンルに属する。状況により、イギル（二弦の胡弓のような楽器）、ショール（たて笛）、ドプシュール（二弦あるいは三弦撥弦楽器）、ブザーンチュ（四弦の擦弦楽器）、ホムス（口琴）伴奏つきで演奏されることもあるし、伴奏がないときもある。

トヴァ人は、喉歌のスタイルが1、2しかないほかの民族と違い8つの唱法がある。ホーメ

イ（高い音のでる喉歌）、カルグラ（低音の喉歌）、スグット（口笛を語源とする、高い音のでる喉歌）、ボルバン（喉歌をトリルのように揺らす）、エゼンギ（喉歌をギャロップのように揺らす）、フンザト（仏教寺院のリードを取る僧侶風の歌唱法）、ホブ・カルグラージ（草原の叫びと呼ばれる喉を緊張させ高い音を出す歌唱法）と ソグ・カルグラージ（合唱あるいは対話的な歌唱法）

しかしのちにホーメイは大衆のすべての階層が使うことができる世俗的な芸能となった。現在、そのような状況になっている。また伝統的に男性の芸能であったが、予期せぬことに「女性の顔」も持つようになった。1998年、最初の女性アンサンブル「トゥバクィズィ」が結成された。その登場はフナシタルオール・オオルジャク（1932-1993）という有名な喉歌歌手と結びついている。女性の喉歌アンサンブルを作るというアイディアは彼が出したものである。彼は発声方法からレパートリーまで未来のホーミー歌手の相談役であった。

1998年トヴァの首都クズル市で行われた「ホーメイ」の国際シンポジウムが「トゥバクィズィ」アンサンブルのデビューの場でありトヴァの音楽シーンにおけるセンセーションとなった。女性ホーミー歌手たちの最初の公共の場でのコンサートはプロの音楽家や一連の愛好家の間で非常に相反した反応が見られた。あるものは聴きほれ、別のものは驚き憤慨し、またあるものは女性歌手のホーメイをまったく受け入れなかった。しかし、時がたつにつれて、アンサンブルは実力があることを証明した。今日「トゥバクィズィ」はロシアや海外で男性の「喉の猛者たち」の技に劣らぬ成功を収めた。批評家たちのみとめるところによれば、アンサンブルはレパートリーの独自性や声の独特さ、そしておそらく高い芸術的な潜在性を持つ点で違っているという。

こうして、「トゥバクィズィ」を初めて、それも日本で聴くことになった、というのもトヴァでは様々な理由で彼らのパフォーマンスを見ることはできなかった。コンサートは小長谷有紀教授と音楽家巻上公一によって組織されたものであった。正直なところ不安であった。なにしろ私の同郷人はステージで日本人には全く分からないトヴァ語で歌ったのだから。日本の人々が私たちの喉歌を受け入れるとは思わなかった。見てみるとコ



楽屋での出会い

ールに座っている大部分の人が目をつぶったままコンサートを聴いている。最初、残念、この歌がわからないのだと思ったが、後で彼らが拍手しているのを見て彼らにとって親しみのあるものなのだと理解した。

小長谷有紀教授と巻上公一さんは強い熱意をもってコンサートを組織し、アンサンブルのコンサートに温かく心のこもったコメントをしてくれたので、私にとりついていて不安はどこかへ行ってしまった。また、喉歌をまったく違う形で理解できるようになった。トヴァで喉歌が私にとって普通のものだとすれば、ここでは喉歌がまさに人々に呪文をかけているのだと。女性たちは素晴らしい声で歌い、その声は虹の色のように注がれるのだと。ホールは敏感に彼女らの歌声に反応していた。やはり現代芸術には言葉の壁はないのだ。

コンサートの後、小長谷先生は満足した顔で同郷の彼女たちと話す機会を与えてくれた。私が民博の外来研究員としてしていると知り、彼女たちはおどろいていた。私にとっては日本の

ホーミー歌手の話を彼女たちから聞いたのが興味深かった。彼女たちの日本でのプロデューサーの巻上公一氏は、日本にトゥバの喉歌を広めることに大変貢献した人である。彼は日本トゥバ「ホーメイジ（ホーメイ歌手）」協会を設立している。輝かしい組織者である巻上氏は頻繁にトゥバのアーティストを日本に招いてコンサートツアーなどを開催し、定期的に「ホーメイ」コンクールを催している。変わらず彼をサポートしているのは彼同様に喉歌が大好きな妻のアヤコさんである。彼らが一緒に行った活動のおかげで多くの日本人がトゥバの音楽文化を知ることができたのである。

また、巻上公一自身もトゥバ人に負けぬ喉歌を披露する。日本には彼らの弟子もおり、喉歌を教えている。最近では女性も多くおり、しばしば男性よりもうまく習得しているとのこと。

等々力政彦氏も有名な喉歌歌手である。有名な音楽ユニット「タルバガン（モンゴルのマーモット）」を同じく喉歌歌手の嵯峨治彦氏と結成した。彼らのデュオは日本でもツアーを成功させ、海外でも国際音楽コンクールやフェスティバルで精力的に活動している。また、彼らはアルバムをいくつか発表している。等々力氏は「トゥバ友の会」というサイトも運営している。彼のところにはトゥバ音楽好きが集まる。1998年彼らのユニット「タルバガン」はクズルで行われた「ホーメイ」コンクールで第2位となったことは外国人音楽家がトゥバの名人たちと極めて難しい音楽のジャンルで肩を並べることができることの証明である。

テラダ・マオは劣らず有名な喉歌歌手である。東大で日本語、日本文学を学んだ彼女は巻上公一をはじめとした日本の喉歌歌手とともに1998年トゥバに最初を訪れた。この旅行が若い日本女性のその後の運命をほぼ決めた。しばらくして彼女は大好きなトゥバに戻り、現在、喉歌を学んでいる。

「トゥバクィズィ」アンサンブルは日本でのツアーを成功裏に行っている時、テラダ・マオはその名人芸でトゥバの観客を驚かせていた。彼女は「ホーメイ」コンクールで2004年と2008年と2度「観客共感賞」を授与されている。2004年、アルタイ共和国の語り部国際コンクールの喉歌部門でも第二位となった。2007年には喉歌のカルグラ部門で優秀賞を授与されている。

民博でのトゥバと日本の喉歌歌手たちとの出会いは大きな出来事であった。ホーメイは私にとって今までは普通のものだったが、突然、まったく違う世界を見せてくれた。今日喉歌は民族的なものではなく、国際的なものなのだと目に見える形で納得させられた。

（ロシア語より荒井幸康訳）

「第17回バルカン・南スラヴ学会」及び「アクセント論特別講義(?)」に参加して

野町素己（センター）

4月15日から18日まで、アメリカのオハイオ州立大学にて上記の国際学会が開催された。この学会はシカゴ大学の言語学者を中心に1978年に創設されたもので、これまで2年おきにアメリカ各地で行われている。この学会に特徴的なのは、研究報告が主に言語学、文学、フォークロア研究、文化研究といった分野に限定されており、なおかつ言語学が報告の大半を占めていることである。また言語学と一口にいても、古典的な文献学的研究から、生成文法や認知文法論に基づく研究、コンピューターを駆使した方言学や社会言語学など多様な分野の研究報告が行われていることも指摘できよう。報告者の層はというと実に幅広い。駆け出しの大学院生から、ヘルムト・シャレル（マールブルク大学）やヴィクター・フリードマン（シカゴ大学）、ブライアン・ジョセフ（オハイオ州立大学）、イリーナ・セダコワ（ロシア科学アカデミー）といったバルカン言語研究の大家までもが常連である。学会の規模は決して

大きくないが、4日間主に南スラヴ語研究に関する報告を聞くということは、日本ではまずあり得ない経験であり、また学会の規模も手伝って、さまざまな研究者と比較的気軽に意見交換ができたため、私にとってはとても心地よいものであった。

今年度のパネル・セッションは、「言語の借用と影響 I・II」、「統語論」、「形態論」、「言語接触に見る意味論と語用論」、「言語態度と言語政策」、「言語分析の手段と材料」、「動詞意味論」、「『バイ・ガニョ』の新翻訳について」、「アルバニア言語学」、



グリーンバーグ教授(左)、スタンキューヴィッチ教授(中)、筆者(右)「ダイクシス」の合計 11 パネルであった。このうち「アルバニア言語学」は、Skype を使用しコソヴォからの中継による報告であった。詳しい学会のプログラムは、次のサイト (<http://bss17.osu.edu/program.html>) を参照されたい。

また、この学会で特筆すべきは、セルビア・クロアチア語研究で大きな功績を残したケネス・ネイラー (1937-1992) を記念した基調講演が組織されることである。本年度はバルカン言語を含めたインド・ヨーロッパ諸語研究で幅広い業績を持つエリック・ハンプ (シカゴ大学名誉教授) が講演する予定だったが、前日に入院されたため、上述ヴィクター・フリードマンとブライアン・ジョセフが同教授の貢献について論じるものに変更された。

全体を通して、特に印象に残ったのは、アメリカの若手研究者が非常に野心的ということである。南スラヴ語圏、特にバルカン半島の複雑な言語状況が研究にも反映され、非スラヴ系の若手研究者であっても、この地域の複数の言語を研究対象としていることが少なくない。バルカン半島の言語研究では、多言語を同時に扱うことが避けがたいのではあるが、実際にそれらを習得し、研究を遂行するには大変な困難が伴う。しかし、ただ野心的なだけではなく、アメリカのスラヴ語研究にはこれを支える人的・物的環境が実際にあるわけだ。そしてこのような学会を通じて、国内外の年長者から建設的な指摘がなされるのは大変素晴らしいことである。このご時勢難しいとはいえ、日本におけるスラヴ語教育・研究環境のいっそうの拡充の必要性を痛感させられた。

尚、多少宣伝になるが、スラブ研究センターでは、「言語と境界」、「言語と社会」、「言語接触」などをキーワードに、南スラヴ・バルカン地域研究にも力を入れ始めており、2月に来日したロバート・グリーンバーグに続き、現在のところ6月にはヨウコ・リンドシュテット (ヘルシンキ大学)、10月にはヴィクター・フリードマン、2011年6月にはブライアン・ジョセフ各氏が来日し、札幌、東京他で講演会がそれぞれ数回ずつ予定されている。このような機会に、当該分野におけるさらなる学術的交流と研究・教育活動の活発化が期待される。

さて、今回の訪米の主な目的は学会参加であったが、上述のグリーンバーグ教授からのお誘いもあり学会後に、イエール大学、コロンビア大学などを訪問し、数多くの研究者と面会する機会を得た。それぞれ印象深かったのだが、特に印象に残ったのはエドワード・スタンキューヴィッチ教授 (イエール大学名誉教授) との面会である。スタンキューヴィッチ教授はロマン・ヤーコブソンの弟子で、その功績はスラヴ語学、一般言語学のみならず詩学、文学研究まで多岐にわたるが、中でも教授のスラヴ語アクセント研究は著名であり、百科事典的な「スラヴ諸語のアクセントパターン」(スタンフォード大学出版、1993年) はその代表作と言ってよく、私も留学時に、授業の予習・復習でしばしば参照した本である。



スロヴェニア語のアクセントについて熱心に語る教授（左）と、圧倒され気味な筆者

その間にご自身の研究の意義に話が移り、それにあわせて「音素の定義は？」、「ロシア語の動詞過去形の単数と複数の対立について論じなさい」、「スロヴェニア語研究者の中で、あなたが最も評価する人とその意義について言いなさい」などと矢継ぎ早に質問を出され、中途半端に答えると徹底的に直され、昼食までの1時間ほど「講義＋演習」を受講するはめになった。尚、横に座っていたグリーンバーグ教授は私に助け舟を出さず、終始ニヤニヤしておられた。少なからず同じ経験をされたはずなので、きっと楽しんでいただろう。

食事中は「講義」であった。タデウシュ・レール・スプワヴィンスキ、アレクサンダル・ペーリッチ、クリスティアン・スタングといったスラヴ語アクセント研究の古典について論じられた。そのついでに有名なロシアのウラジーミル・ディボのアクセント論について何うと、これがどうも「パンドラの箱」だったようで、強い調子で徹底的に批判された。アクセント論は私の専門ではないので、あまり理解できたとは思えないが、とにかく全く気が抜けない食事となった。私が学部3年生の頃、沼野充義先生があるとき、スタンキエヴィッチ教授がスラヴ語学者のヘンリク・ビルンバウムについて徹底的に批判しているのを見たことがあるとおっしゃっていたことがふと思い出され、まさにこれだったのだろうと想像した。

第18回バルカン・南スラヴ学会は、2012年にワシントン大学で開催されることが決まっている。次回の学会の後もスタンキエヴィッチ教授を訪問する約束をしてある。次の「講義」までに時間があるので、それを楽しみに少し「予習」することを心に決めた。

学 界 短 信

◆ 第2回東アジア・コンファレンスに参加して ◆

2010年3月4～5日に韓国のソウルで第2回スラブ・ユーラシア研究東アジア・コンファレンスが開催されました。4つの会場に分かれて24のセッションが組まれた他に、最終日の

夕方には「グローバルな経済危機におけるユーラシア」と題したラウンドテーブルが企画されました(日本代表は溝端佐登史氏)。会議の合間には ICCEES 日本大会誘致のためのプロモーションビデオの撮影がおこなわれました。日本からの参加者は 22 名にのぼり、スラブ研究センターからは、松里公孝、望月哲男、越野剛、須田将、マルチン・ホセク、高橋沙奈美各氏の他、新学術外国人研究員のヤン・チェン氏が参加しました。残念ながら主として日韓の間の連絡の行き違いのため、パネルの組織などがうまくいかない部分もありました。この点は来年度の中国での大会にむけて改善すべきところと思われます。会場に使われたホテルの望月教授の部屋では、ロシアや韓国の研究者も交えて毎晩のように宴会が開かれ、マッコリの杯を干しながら談笑したことが心地よい記憶として残っています。[越野]

◆ 学会カレンダー ◆

2010 年 5 月 22 日 アジア政経学会 2010 年度東日本大会 於北海道大学

6 月 5-6 日 比較経済体制学会全国大会 於大阪市立大学

7 月 7-9 日 スラブ研究センター夏期国際シンポジウム

7 月 26-31 日 ICCEES (国際中欧・東欧研究協議会) 第 8 回世界会議 於ストックホルム

8 月 26-28 日 欧州比較経済体制学会第 11 回隔年大会 於タルトゥー大学 (エストニア)

11 月 18-21 日 AAASS 第 42 回年次大会 於ロサンゼルス

センターのホームページ(裏表紙参照)にはこの他にも多くの海外情報が掲載されています。[大須賀]

大学院だより

文学研究科スラブ社会文化論専修にとって、2009 年度は 4 人が博士号を取得する記念すべき年になりました。新年度から、秋山徹さんは日本学術振興会特別研究員(東京大学)、天野尚樹さんは北海道情報大学非常勤講師、山本健三さんは韓国の長安大学講師、劉旭さんはセンターの新学術領域研究特任研究員として活躍を続けます。また、修士課程は 6 人が修了しました。博士課程修了の秋山さんと修士課程修了の高橋さんが修了者の声を寄せてくれましたので、お読みください。

4 月には、修士課程 5 名、博士課程 4 名(うち内部進学 3 名)の新入生を迎えました。今年度の大学院生およびスラブ研究センター研究生は以下の皆さんです(研究テーマは仮のものを含みます)。[宇山]

学年	氏名	研究題目	指導教員(正・副)	
D3	倉田有佳	在日亡命ロシア人	岩下	荒井
D3	須田 将	スターリン期ウズベキスタンにおけるソヴィエト市民の創出	宇山	岩下
D3	加藤美保子	ロシアの安全保障とアジア太平洋の地域主義	岩下	林
D3	立花 優	アゼルバイジャン現代政治	宇山	松里
D3	井上岳彦	帝政ロシアとカルムイク人	宇山	長縄
D3	小野田悦子	ロシア正教会とカトリック教会の対立関係におけるイエズス会の活動	望月	松里
D3	高橋沙奈美	ロシア正教をめぐる記憶から見る、ポスト・ソヴィエト社会の国民統合問題	望月	松里
D3	櫻間 瑛	ロシア連邦沿ヴォルガ地域における宗教 = 民族関係	宇山	松里
D3	マルティン・ホセク	極東におけるチェコスロヴァキア軍団(1918-1920 年)	林	ウルフ

D3	竹村寧乃	ソ連初期ザカフカス連邦	宇山	長縄
D3	イヴォナ・マレロヴァ	日露文学の関係論（ペレーヴィンと村上春樹）	望月	ウルフ
D2	秋月準也	ミハイル・ブルガーコフと 20 世紀初頭のロシア文学	望月	野町
D2	アレクサンドラ・クリャクヴィナ	有島武郎の「或る女」とトルストイの「アンナ・カレーニナ」における女の運命	望月	野町
D1	斎藤祥平	ロシア人亡命者の擬似科学、1930 年代ユーラシア主義	ウルフ	望月
D1	松下隆志	ウラジーミル・ソローキンと現代ロシア文学	望月	野町
D1	エンリク・マリク	カザフスタン外交政策におけるアジア外交：東アジア・東南アジア地域諸国を中心に	宇山	岩下
D1	中嶋哲平	コーカサスのトルコ系ムスリム知識人の政治思想とその運動	長縄	宇山
M2	吉田真由美	ロシアの学校における文学教育について	望月	荒井
M2	石黒太祐	チェコスロヴァキア連邦解体過程に関する研究	林	家田
M2	平間惇也	ユーラシア主義	望月	ウルフ
M2	アレクサンドル・クラムスコイ	サハリン大陸棚における石油・天然ガス開発とサハリン州内の反応	荒井	田畑
M2	マリヤ・アルチュシキナ	東シベリア・極東地域と北東アジア諸国のエネルギー協力におけるサハ共和国の役割	田畑	荒井
M2	ハン・ボリ（韓寶菀）	中央アジア少数民族の生と死に関する人生儀礼：高麗人を中心に	宇山	長縄
M2	塚田 愛	ウズベキスタンからロシアへの出稼ぎ労働者問題	宇山	山村
M2	宮風耕治	主として 1980 年代以降のロシアの現代 SF の研究	望月	野町
M2	長友謙治	世界の農産物市場におけるロシアの役割	山村	田畑
M1	アセリ・ビタバロヴァ	中央アジア地域の安全保障	岩下	宇山
M1	恩田良平	中央アジアをめぐる外交と援助	宇山	岩下
M1	西原周子	セルビアを中心とするバルカンの言語と政治	野町	望月
M1	野口健太	ロシア経済発展の可能性	田畑	山村
M1	エレナ・ゴルブノワ	ロシア極東地域の発展における中央政府の役割	田畑	荒井
研究生	フェルナンド・ガルシア・ダ・ホシャ	はるかな周縁国の近い作家たち：夏目漱石とマシャ・ド・デ・アシス	望月	
研究生	エカテリーナ・プリーク	日本とサハリン州の都市間交流の歴史	荒井	
研究生	アントン・マトヴェエフ	サハリンの農業と日露農業交流（1980 年代後半より）	荒井	

スラブ社会文化論での 8 年間を振り返って

秋山 徹

私は 2002 年 4 月にスラブ社会文化論専修の修士課程に入学し、先日 2010 年 3 月末に同博士課程を修了しました。8 年間を札幌で過ごしたことになります（留学の 2 年間を含む）。私の専門は中央アジア近代史です。とくにこれまで本格的な研究がなされてきたとは言い難い

クルグズ（キルギス）遊牧社会を中心に据えて研究してきました。高校生の時分に漠然と興味を覚えた中央アジアについて博士論文を書くことになろうとは、想像していませんでした。博士論文では、同社会でのロシア統治の成立と展開について、部族指導者たちの位相に着目しながら考察しました。スラブ社会文化論そして北大は、このテーマを考究する上で絶好の環境でした。スラブ研究センター図書室ならびに北大図書館スラブ・コレクションに所蔵される膨大な資料群へのアクセスは言うまでもなく、日本が誇る世界レベルの研究拠点スラブ研究センターの先生方の聲咳に身近に接することができました。

特に、私の研究生生活において特に重要だったのは、指導教官の宇山智彦先生存在です。そもそも同専修への入学の動機は、先生が1997年に『スラヴ研究』に発表されたカザフ知識人についての御論考を読んで受けた感動、衝撃にあったといっても過言ではありませんでした（いまでもそれは私の研究の原動力であり続けています）。先生は、歴史学者、文学者、政治学者といった多彩な側面をお持ちですが、分野の如何を問わず根底にあるのは、まず何はともあれ他者に耳を傾け、それを的確に理解しようと努めること、だと私は理解しています。そして、それに基づいて鋭く深く——しかし決して重苦しくなく——洞察し、清々しく表現されてきたように思います。たまに先生の研究室に相談に伺ったものでしたが、私は決まってあの鋭い眼光の前でタジタジになるのが関の山でした。几帳面に整理された書類と資料で埋め尽くされた研究室のなかには、教授という肩書を超えた、現代を生き抜く知性とその魂が輝いていて、その姿に私は魅了されていたのだと思います（特に用事がなくても、いろいろ口実を作って、詣でたものです。先生ごめんなさい）。

さらに同専修に全国、そして世界各地から集う気鋭の院生たちからも多くの刺激を得ることができました。私と同年代にして本を出したり、シンポジウムを組織したり、学会賞を受賞したりとめざましい業績を次々にあげる優秀な院生が少なからずいました。特に思い出に残っているのは、金曜二限に開講されるスラブ社会文化論総合特別演習という授業です。これは専修に属する院生は原則として全員参加ということになっていて、毎回2名の院生が自らの研究成果を発表するというものです。専門が多岐にわたる多くの院生に自分の研究をわかってもらうことの大変さを毎回痛感させられました。或る意味、専門の近い院生や研究者が集う学会や研究会よりも、その前提の共通理解といったものがまったく通用せずたいへんチャレンジングだったように思います。この授業はスラブ社会文化論の宝です。全く専門の違う方から意表を突かれたりしましたが、これが不気味に快感でした。フロアの反応が悪く、あるいはコテンパンに批判されると授業の後凹んだものですが、とても貴重な素晴らしい体験だったと思います。

8年間、特に目立った活躍をしたわけでもなく、専修の末席を汚すに過ぎませんでした。難点だらけの私を長い間、寛容に見守ってくださった宇山・長縄両先生をはじめ先生方には頭が上がりません。在籍中に実のある恩返しができたとは、到底思えないのですが、いつの日かその時が来ればうれしいです。どうも有難うございました。

スラブ社会文化論専修での研究を振り返って

高橋慎明

私は、スラブ社会文化論専修修士課程でドストエフスキーの研究を行いました。ここでの研究で実感できた本専修の特色（あるいはメリット）として挙げることができるのは、第一に、一人ひとりの教員の知識の広さ、そして研究の質の高さです。私の指導教官であった望月哲男先生がドストエフスキーの専門家であるということは言うまでもなく、先生のロシア文学

全般そしてロシア文化に対する知識と関心の広さが、私個人では視野が狭いものとなっていたであろう研究を広げてくれました。また他の先生方からも同様に、研究方法に関するアドバイスを受けることができ、それによってより意識的に「論文を書く」ということを実践できました。さらに重要なことは、先生方の懇切丁寧な指導です。このことは、専門的な事柄だけではなく、「語学」という点でより実感することができました。入学当初ロシア語がほとんどできなかった私にとって、先生方の丁寧な語学指導は、非常に有り難いものでした。外国語で書かれた「読めない文章」、「わからない文章」を恥ずかしがらずに質問することができるということ——これはとりわけ外国文学の研究の根幹である語学力を伸ばし、研究をより良いものにすることに繋がっています。またこのような雰囲気は研究上新たな言語を習得する際にも活かされています。

第二に、本大学図書館並びにスラブ研究センターの蔵書量を上げることができます。私の研究に必要な資料は、基本的にこの二つの図書館で手に入れることができました。19世紀のロシアの雑誌のマイクロ資料などをはじめ、入手困難な資料を活用できたことは、私の研究に大いに役立ちました。もう一言資料に関して付け加えると、スラブ関係の膨大な蔵書があることは、例えば、文学以外の資料（政治や経済に関するもの）を活用する上で役立ち、そのことが研究をより緻密なものにしてくれます。

第三に、本専修の特色でもある、学際的なアプローチというスタンス、そしてそれを実践した院生による「総合演習」の授業です。それぞれ異なる専門分野を持つ教員・研究員・学生に対して、自分の研究を発表することは、自分の研究をより客観的に捉えることができるばかりではなく、その意義・面白さを提示する必要性が求められるがゆえに、プレゼンテーションの能力を伸ばすことにも繋がります。また、専門の異なる方々からの意見やアドバイスは、自分の研究を思わぬ方向へ導ききっかけとなっています。

これらのことは、おそらく私だけでなく、院生全員が感じられるものであり、本専修は研究する上で非常に恵まれた環境であったと言えます。

図書室だより

◆ 外国人の見たロシア ◆

オランダの IDC 社が製作・販売するマイクロフィッシュ版のセット *Russia through the Eyes of Foreigners* は、16世紀から20世紀初頭までに単行書として出版された、西欧人によるロシア紀行・見聞録 250 タイトルを収録するもので、マイクロフィッシュ 2179 枚から成ります。テキストは全て英語で、一部、アダム・オレアリウス (1603-1671)、アストルフ・ド・キュスチヌ (1790-1857) など、原著はラテン語やフランス語のものについては、その英訳版を収録しています。原本の大部分は、ロシア国立図書館（サンクト・ペテルブルク、旧サルティコフ・シチェドリノ図書館）の Rossica 部門の蔵書を撮影したもの。

地域的には、シベリア、極東、中央アジア、ヴォルガ、ウクライナなど地方のものが多く含まれていて、たとえば、特定の地方に関する記述を集めて比較したり、年代順に並べたりしたい場合、助けとなるように思われます。

センターでは、今年の初めにこれを購入し、現在、附属図書館で整理作業中ですが、まもなく完了する見込みです。[兎内]

◆ ロシア = オスマン関係図書 第4期 (1857-1914) ◆

オランダの IDC 社では、ここ数年 Russian-Ottoman Relations というタイトルで、西欧諸語による、同時代出版物のマイクロフィッシュに収録したセットを4期に分けて製作を進め、販売を始めていましたが、センターでは、その最終第4期（1857-1914年）を購入しましたので、お知らせします。内容明細を見ますと、英・独・仏語の出版物が中心ですが、ロシア語出版物からの翻訳も相当含まれています。1877-1878年の露土戦争や、ベルリン条約（1878年）に関するものが非常に目につきます。全263タイトル、マイクロフィッシュ1048枚から成り、現在、附属図書館で整理作業が進行中です。[免内]

◆ ニコライ・ラッセル、および日露戦争捕虜関係史料を見いだす ◆

最近、少しずつではありますが、マイクロ資料の遡及入力を進めております。2000年のはじめに購入した、社会革命党関係文書のフィルム146巻も、そうして最近、遡及入力したもののひとつです。

マイクロ資料には、内訳の概要を示すガイドブックが付属し、どこが何の部分かわかるように、各ファイルの要所には目印となるものを写してあるのがふつうですが、実はこの資料にはそういうものがほとんどありません。書店を通じてガイドブックを請求したものの、なしのつぶてで、購入したものの内容をよく把握できないまま過ごしていました。しかし、いつまでもこれでいい筈がありません。原資料を持つオランダの国際社会史研究所のワーキング・ペーパーとして Inventory が出版されていることはわかっていましたので、この際、持っているところから借用させていただこう、と ILL を申し込みましたところ、不明本のため提供できないとのことでした。

ならばとりあえず、書誌レコードだけでも登録しましょう、参考までに OCLC データを見ると、最終巻に Inventory を収録する旨、注記がありました！実際、その通りです。なんのことはない。捜しものは、実はすぐそばにあったのです。

この Inventory は、ごく簡略なつくりです。個々の文書のレベルではなく、ファイルのレベルで、簡単な記述が与えられているだけです。おそらく、文書の内容が、たいへん雑多であるため、これ以上詳細なものを作成するのは難しかったのでしょう。

これを通覧していくうちに、1917年以前の党文書中、日本の項目があることが目にとまりました。ここには14のファイルが列挙されて、次のように記述されています。

Japan

515-517

Letters chiefly from Russian soldiers and prisoners of war to N.K. Russel', to the editor of *Japonija i Rossija*, to the information bureau for Russian prisoners of war in Japan, to P.I. Bulgakov and others. 1904-1906 and n.d. 3 folders.

518-520

Letters to *Japonija i Rossija*, *Vostočnaja Nedelja*, N.K. Russel' / Sudzilovskij, P.I., and others. 1905-1906. 3 folders.

521-522

Hectographed copies of *Drug*, journal of prisoners of war in Japan, editor G. Novikov. 1905. 2 folders.

523

Lists with names of Russian men, wishing to emigrate from Japan to the USA. 1905. 1 cover.

524

Correspondence and other documents concerning the affair N. Russel' / P.I. Klark (Nagasaki group). 1906-1907. 1 folder.

525

Letter from N.K. Sudzilovskij (Russel'). 1907. 1 cover.

526-527

Issues of *Volja*, pamphlets and leaflets from the Volja printing house in Nagasaki. 1906-1908 and n.d. 2 folders.

528

Three letters to N.K. Russel' and photographs from the belongings of N.K. Russel'. 1905, 1908 and n.d. 1 folder.

フィルムを開けてみますと、ニコライ・ラッセル (1850-1930) と静岡収容所のブルガーコフ大尉とのやりとりなどの書簡類に加えて、浜寺収容所で発行された捕虜向け新聞「Друг」、姫路収容所で発行された「Пленник」、ラッセルが神戸で発行した「В плену」、長崎で発行した「Воля」の 85 号から 95 号まで、1907 年 6 月にラッセルたちを「人民解放救援同盟」から除名することを説明するパンフレットなどが、次々と出てきます。

ニコライ・ラッセルについては、和田春樹氏が 1973 年に 2 巻本の評伝を書かれた他、檜山真一氏にも論文があります。また、ソ連解体後のロシアでは、1996 年から 2001 年にかけて、ロスペン社から 4 巻本の社会革命党史料集が出ています。しかし、上記の文書については、まだ利用された形跡がなく、社会革命党のロシア内外諸地域における活動を伝える史料として、そして日本に関してはラッセルやロシア人捕虜の活動を直接に伝える史料として、今後の活用が期待されるように思われます。[兎内]

ウェブサイト情報

2010 年 1 ～ 3 月までの 3 ヶ月間における、センターのホームページへのアクセス数（但し、gif、jpg、png 等の画像形式ファイルを除く）の統計です。[山下]

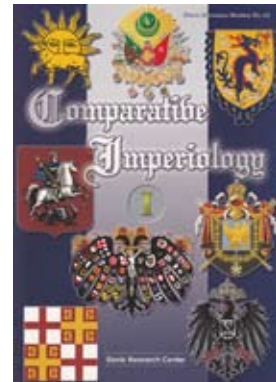
	全アクセス数 (1 日平均)	うち、邦語表紙 アクセス数 (1 日平均)	うち、英語表紙 アクセス数 (1 日平均)	国内からの アクセス数 (%)	国外からの アクセス数 (%)	不明 (%)
1 月	412,238 (13,298)	12,437 (401)	2,516 (81)	135,961 (33%)	165,160 (40%)	111,117 (27%)
2 月	372,818 (13,315)	11,094 (427)	2,294 (82)	114,674 (31%)	167,062 (45%)	91,082 (24%)
3 月	433,248 (13,976)	12,103 (390)	3,566 (115)	117,217 (27%)	257,027 (59%)	59,004 (14%)

編集室だより

◆ Slavic Eurasian Studies No. 22 ◆ Comparative Imperiology の刊行

今世紀に入ってからのスラブ研究センターは、帝国研究の世界的な中心として注目され、様々な出版物を発行してきました。この出版物は、やや視点を変え、日本における帝国研究を世界に紹介しようという視点から編集されたものです。5 人の日本人研究者が仏、日、清、露帝国を考察しています。[松里]

Kimitaka Matsuzato	Introduction: Empire Studies in Japan
Akihito Kudo	Recognized Legal Disorder: French Colonial Rule in Algeria, c. 1840-1900
Toshihiro Higuchi	The Biological Blowback of Empire? The Collapse of the Japanese Empire and the Influx of the "Deadly Environment," 1945-1952
Kazuhiko Yago	The Anatomy and Pathology of Empire: Three Balance Sheets of Russian and Soviet Banks
Kiyohiko Sugiyama	The Qing Empire in the Central Eurasian Context: Its Structure of Rule as Seen from the Eight Banner System
Toyomi Asano	The Collapse of the Japanese Empire and the Normalization of Its Relations with South Korea (1945-1965): Repatriation, Reparations, and External Assets Reconsidered



◆ スラブ・ユーラシア研究報告集 No. 2 ◆ 『体制転換研究の先端的議論』の刊行

「スラブ・ユーラシア研究報告集」の第2号として、科学研究費補助金「旧ソ連・東欧地域における体制転換の総合的比較研究」、「ラテンアメリカと中東欧の政治変動比較」および「中東欧諸国の福祉レジームの比較分析」の成果の一部である、『体制転換研究の先端的議論』が発行されました。ロシアにおける連邦制の改革、東中欧諸国における政党システムの安定化、そして中東欧諸国の福祉枠組みの再編という「現在」の変化について、政治学的に位置づけることを試みた論文を収めています。[仙石]

上野俊彦 ロシアにおける連邦制改革：プーチンからメドヴェージェフへ
 平田武 東中欧諸国における政党システムの「安定化」をめぐる
 仙石学 中東欧諸国における福祉枠組みの再編：政党政治の視点から



◆ スラブ研究センターレポート No. 5 ◆

原子カルネサンスと日米同盟：新しい市場の発見と核拡散防止の刊行

北海道大学スラブ研究センターは、2009年10月30日にワシントンのブルッキングス研究所との共催により、シンポジウム「原子カルネサンスと日米同盟」を開催しました。これは5月に開催された「日米同盟：北東アジアを越えて」の成功を受け、そのフォーマットをもとに組織されたものです。スラブ研究センターと北東アジア政策研究センターは、日米間でこれまで十分には議論されてこなかったテーマを設定し、とくに日米相互で交流の薄い研究分野や人材間の交流を促進したいと考えていますが、今回は特にスラブ研究センター客員准教授の伊藤庄一さん（環日本海経済研究所研究主任）が北東アジア政策研究センターの客員研究員としてワシントンに滞在されることをきっかけとしてシンポジウムが実現しました。レポート第5号はその模様をお届けしています。なお、当日の報告者のスライドにつきましては、直接、ブルッキングスのホームページからダウンロードしてください。[岩下]

http://www.brookings.edu/events/2009/1030_us_japan_nuclear.aspx

◆ スラブ研究センターレポート No. 6 ◆
第 1 回日中・ユーラシア専門家対話の刊行

センターは、2010 年 1 月 11 日に北京で、中国國務院發展研究センター欧亚社会發展研究所との共催により、「日本と中国のユーラシア専門家による戦略対話」を開催しました。これはスラブ・ユーラシアを専門とする日中学者間の初めての対話で、中国側は北京の一線の研究者が集結し、日本側もインドや中国を専門とする研究者も含めた広い「ユーラシア研究チーム」で対峙しました。日中双方からあらかじめ提出されたテーゼと同時通訳の原稿から、本レポートを作成しました。なお、本レポートは、新学術領域研究「ユーラシア地域大国の比較研究」第 1 班（国際関係）と第 3 班（経済）の協働による成果のひとつです。[岩下]

◆ ACTA SLAVICA IAPONICA の刊行 ◆

第 28 号は 5 月上旬に刊行されます。内容は以下の通り。

ARTICLES

- Andrii Danylenko The Ukrainian Bible and the Valuev Circular of July 18, 1863
Sergei Liubichankovskii Становление и развитие неформального объединения уральского губернского чиновничества в конце XIX – начале XX вв.
TAKAKURA Hiroki The Social and Symbolic Construction of Alaas Landscapes in the Siberian Forest among the Sakha
Edyta Barucka Redefining Polishness: The Revival of Crafts in Galicia around 1900
ABURAMOTO Mari Who Takes Care of the Residents? United Russia and the Regions Facing the Monetization of L'goty

DISCUSSION

- Şenol Korkut The Diyanet of Turkey and Its Activities in Eurasia after the Cold War

また、第 29 号には、15 本の投稿が集まり、現在各専門家に査読を依頼しているところです。第 30 号の投稿締め切りは 2010 年 7 月 31 日です。積極的な投稿をお待ちしています。[松里]

◆ 『スラブ研究』 ◆

今号（57 号）は、掲載される原稿が少ないですが、中東欧に関する力作が目立ちます。現在、編集作業を鋭意進めております。[長縄]

< 論文 >

- 加藤有子 イメージ、テキスト、書物：ブルーノ・シュルツ『偶像賛美の書』と短編集『砂時計の下
のサナトリウム』の挿絵
野町素己 カシュブ語の受容者受動構文とその文法化をめぐる
鶴見太郎 なぜロシア・シオニストは文化的自治を批判したのか：シオニズムの「想像の文脈」とオー
ストリア・マルクス主義民族理論
村上亮 ハプスブルク統治下ボスニア・ヘルツェゴヴィナにおける森林政策：森林用益をめぐる国
家規制と慣習的権利の対立と妥協
香坂直樹 スロヴァキアの「首都」をめぐる戦間期の議論：フェドル・ルッペルトの中心都市論を手
掛かりに

< 研究ノート >

- 劉旭 東シベリア～太平洋石油パイプライン建設と資源開発：建設開始から正式稼動開始まで

誰が何をどこで

2009年（1～12月）の専任／非常勤研究員・客員教授の研究成果、研究余滴のアンケート調査（提出は任意）を以下のようにまとめました。なお分類方法は北大の大学情報データベースになっています。〔五十音順〕〔大須賀〕

伊藤庄一 Ⅰ 1 学術論文 ▼ “Russia’s Energy Policy Towards Asia: Opportunities and Uncertainties” “Is There a Solution? Obstacles to and Prospects for Multilateral Energy Cooperation in Asia” (Christopher Len and Alvin Chew, eds., *Energy and Security Cooperation in Asia: Challenges and Prospects*, 143-165; 317-340, Stockholm: Institute for Security and Development Policy) ▼ 中国のエネルギー需要急増と日中関係：北東アジア・エネルギーダイナミズム再考『ERINA Report』85:36-46 Ⅰ 2 その他業績（論文形式）

(1) 総説・解説・評論等 ▼ After the Election: Will Japan Be Different?, The Brookings Institution HP: http://www.brookings.edu/opinions/2009/09_japan_election_itoh.aspx (2009.9 掲載) (5) その他 ▼ (インタビュー記事)『朝日新聞朝刊』(2009.2.16 & 2.19) ▼ (インタビュー記事)『华盛顿观察』(2009.9.3)

▼ (インタビュー記事) *Harvard Political Review* (2009.12.20) Ⅰ 3 著書 ▼ 『北東アジアのエネルギー国際関係』[ユーラシア・ブックレット 139] 63 (東洋書店) Ⅰ 5 学会報告・学術講演 ▼ China’s Rising Oil Demand: A Mitigating Role for the U.S.-Japan Alliance, Brookings Institution (2009.12.10) ▼ Sino-Japanese Competition over Russian Oil Revisited: Has Moscow Scored Its Own Goal?, Conference “Sino-Russian Relations in Central Asia and Beyond,” Paul H. Nitze School of Advanced International Studies (SAIS), Johns Hopkins University, Washington D.C. (2009.5.6-7) ▼ Toward a Grand Design of Energy Security in the Asia-Pacific: The Japan-U.S. Alliance and China’s Engagement, Meeting of New Agenda for US-Japan Partnership Project, JCIE, in Shimoda (2009.1.10)

岩下明裕 Ⅰ 1 学術論文 ▼ 上海協力機構：「反米」ゲームの誘惑に抗して（宇山智彦他編『日本の中央アジア外交：試される地域戦略』115-132, 北海道大学出版会） Ⅰ 5 学会報告・学術講演 ▼ 国境から世界を包囲する，第2回東北アジア地域協力発展国際会議，中国黒竜江省社会科学院，ハルビン（2009.6.14-15） ▼ Japan’s Foreign Policy under the New Administration, The East-West Center in Washington, Washington D.C. (2009.10.29)

宇山智彦 Ⅰ 1 学術論文 ▼ 対中央アジア外交の歴史的文脈と展望：アジア主義と日米関係のはざま（宇山智彦他編『日本の中央アジア外交：試される地域戦略』77-96, 北海道大学出版会） ▼ Была ли исламская альтернатива? Место ислама в национальном движении казахов начала XX века, *Shygys*, 2008, no. 2:143-148 (Almaty, 2009) Ⅰ 2 その他業績（論文形式）(1) 総説・解説・評論等 ▼ グルジア紛争後の中央ユーラシアとロシア：小国のバーゲニング・パワーが作る国際秩序『現代思想』206-217 (2009.3) (2) 研究ノート等 ▼ 中央アジアとコーカサス：近くて遠い隣人？（前田弘毅編『多様性と可能性のコーカサス：民族紛争を超えて』31-58, 北海道大学出版会）(3) 書評 ▼ (久保慶一、西山克典、鳥山祐介、家田修、松里公孝と)『講座 スラブ・ユーラシア学』批評と応答『スラブ研究』56:215-243 (5) その他 ▼ グルジア紛争後の中央ユーラシアにおける国際関係：小国のバーゲニング・パワーの重要性（『中・東欧・コーカサス及び中央アジアから見た欧州の安全保障情勢（外務省委託研究「安全保障に関する知的交流」報告書）』23-38, 財団法人日本国際フォーラム） ▼ 中央アジアを理解するための6つの鍵『外交フォーラム』38-41 (2009.6) ▼ ロシア帝国論から比較帝国論へ『日本国際政治学会ニューズレター』120:8 ▼ 上海協力機構と新疆民族問題：上海での会議に参加して『スラブ研究センターニュース』118:14-16 ▼ (河東哲夫・輪島実樹・北野尚宏と) 特別座談会：なぜ中央アジアを援助するのか『国際開発ジャーナル』38-41 (2009.7) Ⅰ 3 著書 ▼ (クリストファー・レン、廣瀬徹也と共編著)『日本の中央アジア外交：試される地域戦略』[スラブ・ユーラシア叢書 6] xiii+200 (北海道大学出版会) Ⅰ 5 学会報告・学術講演 ▼ A Note on the History of *Jut* in Kazakhstan: Climatic Factors in Massive Loss of Livestock, International Workshop “Reconceptualizing Cultural and Environmental Change in Central Asia: An Historical Perspective on the Future,” Research Institute for Humanity and Nature, Kyoto (2009.2.2) ▼ The Roles of Small Regions in Intercultural Relations and Conflicts: From the Bokey Horde to Abkhazia, International Seminar “Eurasian Perspectives: In Search of Alternatives,” Maulana Abul Kalam Azad Institute of Asian Studies, Kolkata (2009.2.4) ▼ Central Asia: Japan’s Diplomatic and Academic Commitment, Symposium “The U.S.-Japan Alliance: Beyond Northeast Asia,” The Brookings Institution, Washington, DC (2009.5.8) ▼ Mutual Relations and Perceptions of Russians and Central Asians: Preliminary Notes for Comparative Imperial Studies, The First Congress of the Asian

Association of World Historians, Osaka University (2009.5.31) ▼ Possibilities of Japan-China and Japan-SCO Cooperations, The 9th Conference of Central Asian & Shanghai Cooperation Organization, Shanghai Academy of Social Sciences (2009.7.18) ▼ Lessons of the Tajik Civil War for Conflict Resolution: Moderate International Mediation and Initiatives of Local Actors, International Conference "Eurasian Peace & Cooperation: Challenges & Opportunities," University of Kashmir, Srinagar (2009.8.17) ▼ 中央ユーラシアと中東を結ぶもの・分けるもの, 日本中東学会第15回公開講演会「中東と中央ユーラシア」北海道大学 (2009.10.24) ▼ Changing Religious Orientation among Kazakh Intellectuals in the Tsarist Period: Between Sharia, Secularism, and Philosophical Search, International Workshop "Religion and Society in Central Eurasia: New Sources for the Religious History of Kazakhstan," Cini Foundation, Venice (2009.10.30)

ウルフ、ディビッド Ⅰ 1 学術論文 ▼ Open Jaw: A Harbin-centered View of the Siberian-Manchurian Intervention, 1917-22, *Russian History*, 36(3):339-359 Ⅰ 3 著書 ▼ (共著) Authored the three "Russia" chapters 7, 13 and 22 (三谷博他編『大人のための近現代史 19世紀編』56-62, 114-121, 205-214, 東京大学出版会) Ⅰ 5 学会報告・学術講演 ▼ Stalin's Vision of the Ukraine, 1944-1947, Ukrainian Research Institute, Harvard University (2009.2) ▼ Stalin's Eurasian Foreign Policy, 1944-1953, Center for East Asian Studies, Wesleyan University (2009.4) ▼ Two-Hundred Conversations with Joseph Stalin, Davis Center, Harvard University (2009.5) ▼ Joseph Stalin's India Policy, 1947-1953, Cold War International History Project, Woodrow Wilson Center for International Scholars (2009.5) ▼ Rethinking "Intervention" in Russia's Great War, 41st Convention of the AAASS, Boston (2009.11)

草野佳矢子 Ⅰ 2 その他業績(論文形式) (5) その他 ▼ (博士論文)『第一次革命前ロシアの統治官僚と社会: 内相ブレーヴェの官僚絶対主義的改革の試み』(早稲田大学大学院文学研究科)

後藤正憲 Ⅰ 2 その他業績(論文形式) (2) 研究ノート等 ▼ 実践としての知の再/構成: チュヴァシの伝統宗教とト占『スラヴ研究』56:157-178 Ⅰ 5 学会報告・学術講演 ▼ How to Construct the Past: Beyond Dualistic Theory of Time, First East Asian Conference for Slavic Eurasian Studies, SRC, Sapporo (2009.2.5-6)

塩原俊彦 Ⅰ 1 学術論文 ▼ ロシアの原子力産業と原発『ロシアNIS調査月報』32-47 (2009.7) ▼ ロシア経済危機への国家支援策: ミクロレベルの分析『法政大学イノベーション・マネジメント研究センター Working Paper Series』65:1-40 ▼ ロシア経済危機のミクロ分析『ロシアNIS調査月報』12-25 (2009.12)

Ⅰ 2 その他業績(論文形式) (1) 総説・解説・評論等 ▼ 企業支援基準の明確化などが必要なロシアの産業再生策『月刊エネルギー』72-75 (2009.3) ▼ パイプラインをめぐる分析アプローチをめぐる諸問題『石油・天然ガスレビュー』[JOGMEC] 43(5):33-45 ▼ ロシアの核兵器と原子力産業(上)『軍縮問題資料』347:38-47 ▼ ロシアの核兵器と原子力産業(下)『軍縮問題資料』348:12-25 ▼ 世界を巻き込む「ガスパイプライン戦争」を読み解く『月刊エネルギー』10-18 (2009.11) (5) その他 ▼ ロシアの最新事情『電通報』8 (2009.10.5) Ⅰ 3 著書 ▼ 『「軍事大国」ロシアの虚実』241 (岩波書店) ▼ 『ミクロ分析: 経済危機下のロシア』[ユーラシア・ブックレット150] 63 (東洋書店)

高尾千津子 Ⅰ 1 学術論文 ▼ アシュケナズィム・ユダヤ人: ディアスポラの変容(駒井洋、江成幸編『ヨーロッパ・ロシア・アメリカのディアスポラ』[グローバル・ディアスポラ叢書4] 176-193, 明石書店)

▼ Birobidzhan Project from the Japanese Perspective (Boris Kotlerman, ed., *Mizrekh: Jewish Studies in the Far East*, 49-63, Peter Lang: Frankfurt am Main) Ⅰ 2 その他業績(論文形式) (3) 書評 ▼ 野村真理著『ガリツィアのユダヤ人: ポーランド人とウクライナ人のはざまで』(人文書院, 2008)『ユダヤ・イスラエル研究』23:91-93 (5) その他 ▼ ハルビンのユダヤ人と日本『セーヴェル』25:21-26 Ⅰ 5 学会報告・学術講演 ▼ Japan Faces Its Jews: Harbin Jewish Community under Japanese Rule, The Fifteenth World Congress of Jewish Studies, Hebrew University (2009.8.5)

田畑伸一郎 Ⅰ 1 学術論文 ▼ The Influence of High Oil Prices on the Russian Economy: A Comparison with Saudi Arabia, *Eurasian Geography and Economics*, 50(1):75-92 ▼ The Impact of Global Financial Crisis on the Mechanism of Economic Growth in Russia, *Eurasian Geography and Economics*, 50(6):682-698 ▼ 『経済研究』に見る社会主義経済システムの崩壊と資本主義経済化『経済研究』60(4):331-337 ▼ 岐路に立つロシア経済: マクロ経済と財政の視点から『ロシアNIS調査月報』1-17 (2009.5)

▼ ロシア経済: 油価高騰による高成長の終焉『国際問題』580:26-35 ▼ 世界金融危機とロシア経済の現状『ERINA REPORT』90:2-15 Ⅰ 2 その他業績(論文形式) (1) 総説・解説・評論等 ▼ 世界金融危機により冷水を浴びたロシア経済『DIO』[連合総研レポート] 234:8-9 (3) 書評 ▼ 塩原俊彦著『パイプラインの政治経済学: ネットワーク型インフラとエネルギー外交』(法政大学出版会, 2007)『比較経

済研究』46(1):134-137 Ⅱ 3 著書 ▼ (編著)『超える・向きあう・拓く:「ユーラシア地域大国の比較研究」への期待』[比較地域大国論集 1] 29 (スラブ研究センター) Ⅱ 5 学会報告・学術講演 ▼ Changes in the Mechanism of Economic Growth in Russia under the World Financial Crisis in 2008, 41st Convention of the AAASS, Boston (2009.11.13)

兎内勇津流 Ⅱ 2 その他業績 (論文形式) (1) 総説・解説・評論等 ▼ イワン・マホフ「ロシアのいろは」をめぐって『はこだて外国人居留地研究会会報』6:10-14 (5) その他 ▼ (データベース) 帝政期ロシアの地図帳 <http://srcmaterials-hokudai.jp/> (2009年5月公開開始) Ⅱ 5 学会報告・学術講演 ▼ 近代極東露領歴史地図データベース作成の試み, 科研費基盤研究 (A)「アフロ・アジアの多元的情報資源の共有化を通じた地域研究の新たな展開」2008年度第4回研究会・HGIS研究会合同研究会, 京都大学地域研究統合情報センター (2009.2.23) ▼ イワン・マホフ「ロシアのいろは」をめぐって, 日本図書館文化史研究会 2008年度第3回研究会 (「はこだて外国人居留地研究会」と共催), 函館市中央図書館 (2009.3.20)

長縄宣博 Ⅱ 1 学術論文 ▼ 帝政ロシア末期のワクフ: ヴォルガ・ウラル地域と西シベリアを中心に『イスラム世界』73:1-27 Ⅱ 5 学会報告・学術講演 ▼ Muslim Travelers from Russia to the Ottoman Empire: Some Thoughts on a Research Agenda, International Seminar “Eurasian Perspectives: In search of alternatives,” Institute of Asian Studies, India (2009.2.4) ▼ Muslim Travelers and Empire: Local Politics and World Order in Late Imperial Russia, Junior Scholars Training Workshop “Mobility in Russia and Eurasia,” University of Illinois at Urbana-Champaign (2009.6.17) ▼ セルゲイ・アバシン (ロシア科学アカデミー民族学・人類学研究所) 報告「ロシアの中央アジア征服: 帝國的・民族的視点」におけるコメントータ, ロシア史研究会 2009年度大会, 法政大学 (2009.10.10) ▼ 近現代史の視点から, スラブ研究センター共同利用・共同研究拠点公募プログラム・シンポジウム「北西ユーラシア歴史空間の再構築: ロシア外部の史料を通じてみた前近代ロシア世界, 札幌 (2009.11.1)

野町素己 Ⅱ 1 学術論文 ▼ ライコ・ナフティガルについて (没後 50 周年によせて) (『プリモシュ・トゥルーパーの生誕 500 周年およびスロヴェニアの EU 議長国記念スロヴェニア言語・文化シンポジウム発表論文集』58-71, スロヴェニア言語文化研究会) Ⅱ 2 その他業績 (論文形式) (3) 書評 ▼ C.M. Кульбакинъ, *Славянская палеография* 『ロシア語ロシア文学研究』41:80-83 (5) その他 ▼ (インタビュー) 文化と社会の中で変容する言語『リテラポプリ』37:10-11 ▼ (概説) 西ポレシア語 (の試み)『地球ことば村メールマガジン』<http://www.chikyukotobamura.org/muse/low090827s.html> ▼ ロムアルド・フシチャ教授をお迎えして『スラブ研究センターニュース』117:21-23 ▼ セルビア科学芸術アカデミー会員 Irena Grickat-Radulović (1922-2009) を偲ぶ『スラブ研究センターニュース』119:19-21

Ⅱ 5 学会報告・学術講演 ▼ О грамматикализации дативного пассива в кашубском языке, Международный научный симпозиум «Славянские языки и культуры в современном мире», Москву大学 (2009.3.24-26) ▼ On the Recipient Passive in Kashubian, British Association for Slavonic and East European Studies Conference 2009, ケンブリッジ (2009.3.28-30)

林忠行 Ⅱ 1 学術論文 ▼ 東中欧諸国における政党システム形成の比較:「基幹政党」の位置取りを中心にして『比較経済研究』46(1):1-15 Ⅱ 2 その他業績 (論文形式) (1) 総説・解説・評論等 ▼ 東中欧における民主化とナショナリズム: チェコスロヴァキアの事例から (『リレー連載』ナショナリズムとデモクラシー 8)『未来』515: 23-31 (5) その他 ▼ チェコ政党・選挙データ (ポスト社会主義諸国の政党・選挙データベース作成研究会編『ポスト社会主義諸国 政党・選挙ハンドブックⅡ』[CIAS Discussion Paper No.12] 5-22, 京都大学地域研究統合情報センター) Ⅱ 3 著書 ▼ (編著) (大串敦と共編著) *Slavic Eurasian Studies No. 21, Post-Communist Transformations: The Countries of Central and Eastern Europe and Russia in Comparative Perspective*, 180 (SRC)

前田しほ Ⅱ 2 その他業績 (論文形式) (5) その他 ▼ 女性にとっての戦争: パノーフ『道づれ』とアレクシエーヴィチ『戦争は女の顔をしていない』(第 59 回定例総会・研究発表会報告要旨 [予稿] 集『ロシア語ロシア文学研究』41 号別冊:10 Ⅱ 5 学会報告・学術講演 ▼ 現代ロシア女性文学におけるジェンダー理解とその可能性, 新学術領域研究「ユーラシア地域大国の比較研究」第 2 回全体集会, スラブ研究センター, 札幌 (2009.7.22) ▼ 女性にとっての戦争: パノーフ『道づれ』とアレクシエーヴィチ『戦争は女の顔をしていない』, 2009 年度日本ロシア文学会研究発表会, 筑波大学 (2009.10.24) ▼ Чем интересен авторский стиль Валерии Нарбиковой?, Konferencja: wielkie tematy kultury w literaturach słowiańskich. c i a ł o, Uniwersytet Wrocławski, Instytut Filologii Słowiańskiej IX międzynarodowa konferencja naukowa, Poland (2009.11.19)

松里公孝 ① 1 学術論文 ▼ Inter-Orthodox Relations and Transborder Nationalities in and around Unrecognised Abkhazia and Transnistria, *Religion, State and Society*, 37(3):239-262 ▼ The Five Day War and Transnational Politics: A Semiospace Spanning the Borders between Georgia, Russia and Ossetia, *Demokratizatsiya: The Journal of Post-Soviet Democratization*, 17(3):228-250 ▼ ダゲスタンのイスラーム：スーフィー教団間の多元主義的競争（前田弘毅編『多様性と可能性のコーカサス：民族紛争を超えて』121-152, 北海道大学出版会）① 2 その他業績（論文形式）（3）書評 ▼ V. Gel'man, S. Ryzhenkov, E. Belokurova, and N. Borisova, *Reforma mestnoi vlasti v gorodakh Rossii 1991-2006* (St Petersburg, 2008), *Russian Review* 68(1):177-178 （5）その他 ▼（エッセイ）台北とテヘランの学会に参加して『スラブ研究センターニュース』116:15-21 ▼（エッセイ）「スラブ研究者が甘粛で考えたこと」「ICCEES 執行部の幕張訪問」『スラブ研究センターニュース』119:14-19, 21-25 ① 3 著書 ▼（編著）*Slavic Eurasian Studies* No. 20, *Регионы Украины: Хроника и руководители 3 Крым и Николаевская область*, 256 (SRC) ① 5 学会報告・学術講演 ▼ Semi-presidentialism and Parliamentary Oligarchy in Post-Orange Ukraine, First East Asian Conference for Slavic Eurasian Studies, SRC, Sapporo (2009.2.5-6) ▼ Political Discourse and Trans-border Politics in Georgia and Ossetia after the Five-day War, Conference, "Putin's Blueprint and the Five-Day War in Georgia: Security and Political Implications in the CEE/CIS and U.S. Policy," Heldref Publications, Washington, DC (2009.4.6) ▼ Cultural Geopolitics and the New Border Regions of Eurasia, International Conference "Eurasianess and National Identities in the Post-Soviet Era," Hanyang University, Seoul (2009.6.18-19) ▼（澤江史子と）信教国家の再建：トルコ、ロシア、中国におけるイスラーム教会論，新学術領域研究第2回国際シンポジウム「ユーラシア地域大国の政治比較：中国、ロシア、インド、トルコ」，法政大学（2009.12.12-13）

望月哲男 ① 1 学術論文 ▼ The Shadow of Gogol in Contemporary Russian Literature (in Korean) (*Гоголь и современность*, 44-72, Korea University Press) ① 2 その他業績（論文形式）（3）書評 ▼ ユーモラスで怪奇で哲学的な純愛物語：大石雅彦著『モスクワの声』『水声通信』28:66-68 ▼ 藤沼貴著『トルストイ』（第三文明社，2009）『週間読書人』4（2009.9.25）▼（作品解説）トルストイ『イワン・イリイチの死』，トルストイ『クロイツェル・ソナタ』，ソローキン『ロマン』（水野忠夫編『ロシア文学：名作と主人公』82-87, 258-261, 自由国民社）（5）その他 ▼『アンナ・カレーニナ』を訳して『北海道新聞』7（2009.2.2 夕刊）▼ロシア文学の現況と翻訳・研究 08（『文芸年鑑 2009 年版』90-92, 新潮社）▼ ITP の場をめぐる：ハーバード、オックスフォード訪問記『スラブ研究センターニュース』117:17-21 ① 5 学会報告・学術講演 ▼ Тень Гоголя в современной русской литературе (Paper contribution), Symposium, Korean University (2009.5.9) ▼ ソ連後のロシア文学におけるゴーゴリ・イメージ，ワークショップ「生誕 200 周年記念：ゴーゴリ文学への問いかけ」，2009 年度日本ロシア文学会研究発表会，筑波大学（2009.10.24）▼ Perception of Dostoevsky and Tolstoy in Contemporary Russia and Japan, The Davis Center Seminar for Russian and Eurasian Studies, Harvard University (2009.3.11) ▼ Perception of Dostoevsky in Contemporary Russia, Seoul National University (2009.11.21)

会議 (2010 年 1 ～ 3 月)

◆ センター協議委員会 ◆

2009 年度第 9 回 1 月 6 日

議題

1. 教員の人事について

議長から、前回、2009 年 12 月 15 日開催の第 8 回協議委員会において選考委員会から報告のあった北海道大学スラブ研究センター特任研究員「越野剛」氏につき、北海道大学スラブ研究センター教員選考内規第 3 条の規定に基づき、全学運用教員（地域比較部門）助教としての可否について諮られ、投票の結果、全員一致で「越野剛」氏を全学運用教員（地域比較部門）助教候補者とすることが決定された。

2009 年度第 10 回 3 月 15 日

議題

1. 客員研究員について

議長から、資料 1 に基づき応募者の経歴及び研究内容の紹介がなされた後、2010 年度ス

ラブ研究センター客員研究員への採用の可否について諮られ、6名全員の採用並びに客員教授又は客員准教授の称号を付与することが承認された。

2. 規程等の改正について

議長から、資料2に基づき規程等の制定、改正及び廃止について説明がなされた後諮られ、これが承認された。

3. 副センター長について

議長から、資料3に基づきスラブ研究センターに副センター長を置くことについて説明がなされた後諮られ、これが承認された。

みせらねあ

◆ ジュークスさんご逝去 ◆

1992-93年外国人客員研究員としてセンターに滞在されたオーストラリア国立大学名誉教授のジェフリー・ジュークス氏が、去る3月20日深夜にメルボルンの自宅で急逝された。81歳だった。ソ連軍事・戦略史を専門とされ、第二次大戦期の日露関係や日露戦争史の研究にも力を注いでいたジュークス氏は、客員としての滞在后も定期的にセンターを訪問し、日本の研究者と親交を深めていた。また引退後にその蔵書の一部をセンターに寄贈される計画も立てていた。今年も元気な姿に触れられると思っていた矢先のことだったので、突然のご逝去が惜しまれる。ご冥福をお祈りしたい。[望月]



1992年当時のジュークス氏

◆ 人物往来 ◆

ニュース120号以降のセンター訪問者（客員、道央圏を除く）は以下の通りです（敬称略）。
[岩下／大須賀]

12月18日 福岡加容（千葉大）

1月26日 Moinuddin Aqeel（国際イスラム大、パキスタン）、小松久恵（大阪大）

2月1日 Boris Aforin（歴史・考古・民族学研究所、ロシア）

2月3日 中村友一（中部大）

2月6日 小林知子（福岡教育大）、松下佳弘（京都大）

2月12日 鈴木隆泰（山口県立大）

2月18日 Robert Greenberg（イエール大、米国）、大島一（国立国語研究所）

2月28日 今仁直人（横浜国立大）、貝澤哉（早稲田大）、北見論（神戸市外国語大）、下里俊行（上越教育大）、根村亮（新潟工科大）、渡辺圭（千葉大・院）

3月7日 横田慎介（榊ゆめみ）

3月14日 佐々木路子

3月15日 井上暁子（東京大・院）

3月23日 Alexander Bukh（筑波大）

4月14日 下斗米伸夫（法政大）

4月22日 永井リサ（大阪大）

4月24日 秋田茂（大阪大）、粟屋利江（東京外国語大）、川島真（東京大）、木畑洋一（成城大）、古矢旬（東京大）

4月に修士課程5名、博士課程4名（うち内部進学3名） の新入生を迎え、23日に新入生歓迎会が開かれました （詳しくは「大学院だより」を参照）

by Tachibana & Matsushita



宇山先生からの歓迎のあいさつ（壇上、後ろから撮影）



岩下先生からの乾杯のあいさつ



にぎやかな宴会風景



幹事の宮風さん。おつかれさまでした。

エッセイ

家田修	オックスフォード・ラウンドテーブルに出席して	p. 11
マリーナ・モンゲーシュ	日本人が喉歌について私に再び「気づかせて」くれたこと	p. 14
野町素己	「第17回バルカン・南スラヴ学会」及び 「アクセント論特別講義(?)」に参加して	p. 16
秋山徹	スラブ社会文化論での8年間を振り返って	p. 20
高橋慎明	スラブ社会文化論専修での研究を振り返って	p. 21

2010年5月10日発行

編集責任 大須賀みか
編集協力 家田修
発行者 岩下明裕
発行所 北海道大学スラブ研究センター
060-0809 札幌市北区北9条西7丁目
Tel.011-706-3156、706-2388
Fax.011-706-4952
インターネットホームページ：
<http://src-h.slav.hokudai.ac.jp/>